

狂言

昭和35年1月1日発行
第一行所
名古屋市中区東門前町5ノ2
井上重兵衛方 電話1430
名古屋狂言共同社
印刷所 地上社 電話1190
株式会社

狂言人語

共同社

歌村彦四郎

〇年頭の辞

まづ明けましてお目出度う御座います。昨秋は未曾有の台風にいたためられあしげなき秋で御座いました。

幸いに全国的には豊年で産業界も好景氣を来し喜ばしいことであります。

この狂言紙もいよゝ第四年を迎へることとなりました、文法もかな遣ひも知らず目くら蛇におじづのムチャクチャに、氣随氣まゝに書き記して参りました。

どうぞ今後もあかずに「狂言」のために御後援御指導の程を御願いたします。

〇第二回朝日狂言会

(和泉流の若き宗家を観る会)

来る三月十三日別掲の通りの番組で朝日狂言会を開催いたします。

和泉保之氏は三宅藤九郎氏の息で和泉流の家元を継承され、父君のよき薫陶をうけ、近來めき／＼と腕をあげ、その實録も充分に出て来ました。

昨秋東都に於て若冠二十二才で秘曲花子、と取組み見事になしとげて喝采を博しました、これを名古屋にむかへ多くの観客層に観て欲しいと思ひ今回の企画となつたのであります。

「花子」はこれを歌舞伎化した身替座禪と云う題名で、よくその内容を

示しておりますので、今さら筋を述べるまでもありません、たゞ釣狐とともに兩番といはれて代表の大曲であります。

賀正

昭和三十五年元旦



(三番目は井上松次也)

名古屋狂言共同社

〇狂言の回顧

昭和六年の新春紙に、故石田元季先生が名古屋と能狂言、と題し名古屋開

府以来の能と狂言、とて、其の変遷を回顧し、ひいて今日の隆盛あることを予期しておられたと思はれます、その中狂言についてを抜萃いたします。

狂言に至つては、何といつても当地は和泉流の本場である。実は此の点大いに威張つても好いのである。和泉もとは江州坂本から尾州へ抱へられ、この五郎左衛門元直といつた人は、寛永年間に禁裡のお能で大曲花子を勤め、和泉守を受領した。それより名人が次々に出て、家元の山脇元清が明治四十四年に没し、今は家元を欠いてゐるが、流儀は榮えつゝあるのである。なほ弟子家に山脇得平、野村又三郎、早川幸八の系統がある。晩年に東京に出てあくの抜けた渋い、しかも怪妙な特技で盛名を馳せた井上菊次郎翁は四代目幸八の門人であつた。

狂言の詞章は我國笑ひの文学中の上乘なるもの、狂言の演技はわが國笑ひの芸術中の尤なものである。望む所は本格的な——上品な淡味のある深い潤ひのある演出である。この善い育ちを持つ和泉流の狂言をその母國に益々榮えしめたいのは、私一人の願ひであるまい。享保の昔、古渡の稲荷で七日の狂言尽が行はれ、毎日かはつた風流とかはつた狂言があつて、京阪の同流狂言方が悉く来演した盛況を偲はずにはあられない。古典芸術の正札が改めて見直され附け直される機運の今日に当り、回顧的の一文をものして、真の隆盛を祈るの意を表したいと思ふのである。

〇茂山彌五郎氏芸術賞受賞

大阪市教委は秋の市民文化祭に参加特賞の第一人者として芸術賞を受賞された、はるかにお喜び申上げます。

一月の催能

- 一月十日 学生自演能
 - ツレ水野 良子
 - ツレ大島 穠子
- 一月十日 能竹生嶋
 - シテ富田悠紀子ヲキ高安 滋郎
 - 井上礼之助
- 一月十日 能狸
 - シテ伊吹洋一郎ヲキ西村 鉄也
 - シテ谷口 正直
 - シテ岸津 宗甫
- 一月十日 能夜討曾我
 - シテ大藤内 河村丘造 佐藤秀雄
 - シテ難波 昌広
- 一月十日 狂言 宗論
 - 井上松次郎 大野 弘之
 - 佐藤卯三郎
- 一月三十一日 竹韻会
 - シテ丸 秀夫ヲキ高安 滋郎
 - シテ大槻 野村又三郎
 - シテ佐藤 豊次ヲキ西村 欽也
 - シテ佐藤 秀雄
 - 石田 喜樹 井上松次郎
- 一月十七日 能巻
 - シテ内藤 泰ニヲキ西村 欽也
 - シテ木 大野 弘之
 - シテ宝生 九郎ヲキ西村 弘敬
 - 二階堂 井上松次郎
- 一月十七日 狂言 鬼瓦
 - 早打 山本光次郎 佐藤友彦
 - 佐藤卯三郎 井上礼之助
- 一月二十四日 能雪
 - シテ花木 和代ヲキ高安 滋郎
 - 赤松 泰久
- 一月二十四日 能邯鄲
 - シテ伊藤嘉奈子ヲキ高安 滋郎
 - 井上 義次
- 一月二十四日 能夜討曾我
 - シテ大藤内 河村丘造 佐藤秀雄
 - シテ難波 昌広
- 一月十五日 狂言 文山賊
 - 近藤 雅弘 阿部 武弘
 - 清韻会
- 一月十五日 能竹生嶋
 - シテ杉浦 重次ヲキ高安 滋郎
 - 伊勢 信雄
- 一月十五日 能頼
 - シテ栗木勝太郎ヲキ西村 弘敬
 - 井上礼之助
- 一月十六日 狂言 餅酒
 - 井上松次郎 河村 丘造
 - 佐藤卯三郎
- 一月十六日 能狸
 - 朝日土曜クラブ(松坂屋)
 - シテ木田 秀男
- 一月十六日 狂言 千鳥
 - 井上松次郎 河村 丘造
 - 佐藤卯三郎

狂言の解説 歌村彦四郎

文山賊(ふみやまだち)
心細い山賊二人が仕事を仕損じ、お互に云いつつ組うちとなるが人に知られず死ぬのは本意ないと、書置を残すこととし書置を置いてあるうちに女房子供のこと思い出し、余りのあわれさに二人共に泣き出し思へば無用の死と手に手をとつて我が宿へ。

餅酒(もちざけ)
酒と餅とは上戸と下戸の各自出度い馳走である。その菊酒を加賀から、円鏡をば越前からそれらの百姓が年貢納に都へ上るのですが、ツイ年末は大雪で峠が越せず春に及んでの上京、二人は途中で落ち合った、納め時の延引を叱られるかと思ひのほか、兩人の田舎めいたノンビリさが殊の外に上つ方のお気に叶ひ上々の首尾で相舞で立ちかへる。

千鳥(ちどり)
かねかひの悪い主に仕へる太郎冠者が云いつけられて祭りの酒をとり酒屋へ行きます、引替でなげねば渡さぬと云ふ酒屋を津島まつりの有様の話、稚児流鎗馬の真似などをして四苦八苦のすえ、まんまと酒樽を持ち一お馬が参る(一)と逃げかへる。

鬼瓦(おにがわら)
都に訴訟のため在京した田舎の大名、目出度帰郷することになったので、お礼のため困齋堂の薬師如来に参詣する国元へ帰つたら小サイ堂を建立したいからと、造作を見てるうち大屋根の破風の鬼瓦を見て、さめさめと泣き出すを太郎冠者がいぶかつて尋ねますと国元に残して来た女房にそのまゝの顔ぢやと落涙します、太郎冠者は笑いを殺してあすにもお帰りになればお目に

かゝれますと云はれ、ア、そうであつたとよろこび兩人して笑とめる皮肉な寸劇で人間の愛情の真実を表現した短篇の名作であります。
宗論(しろうん)
法華僧は身延よりのかへり浄土僧は善



花子 和泉 保之

昭和三十五年三月十三日(日) 午後一時
於 熱田神宮能楽殿
第二回 朝日 狂言会
(和泉流の若き宗家を継ぐ会)

Table listing cast members and roles for the play. Roles include 鬼瓦, 鎌腹, 縄ない, 花子, 首引, 会員券, 祝言, 主備, 狂言共同社.

光寺よりのかへり途に出会いお互に都まで同道することになりました、途すがら自分の宗旨の有難さを説きあい、敗けずとらざるのせりあいが高じて遂

に踊り念仏にまで発展、踊るうちに題目をとりちがへ「今在西方妙阿弥陀。娑婆示現観世音。三世利益。同一鉢と此の文の聴く時は、法華も弥陀も隔てはあらず、今より後はふたりが名を「妙、阿弥陀」とぞ申しける」謡ひ舞つて仲よくかへります。
いつ見ても面白い狂言で玄惠法師の快心の作の一つでせう。

いつも使ひに出される太郎冠者、和泉の堺へ香を求めに行くと云ひつけられました、志びりが起つて歩かれませぬと断る、一策を案じた主の方便に太郎冠者は親重代のしびりに宜命をふくめ、コピタ返事をしなほつたしびりに再び和泉の堺へ行くと云はれ、子供他愛もない軽い狂言であります大藤内(おうとうない)

これは夜討曾我の間になつておりますが狂言としても演ずることもあります。備前国吉備津の宮の神主大藤内が鎌倉に來て、祐経に可愛がられ曾我兄弟討入の夜も祐経の供をして女房どもと寝込んでゐたところを討入のさわざに取り乱したなりで、あわてふためいて来たところを通行人になふられるのであります、その臆病のなかに工口味を話すところが眼目であります。河村氏のような固い人がいかに気分を出されるかが見ものであります。

狂言初心(一) 野村 広二

新しい年を迎えます。正月になると一度に「日本の伝統」がよみがえつてまいります。おとそに雑煮餅。わたくしの家もお松の鉢をかざり、南日射しの居間で、お祝いの膳を前に、テレビとラジオの雅楽と狂言、をみたりきいたりするのが楽しみです。元旦早朝か

らです。能楽愛好の方々は誦い初め、舞いぞめに気もはづむことでしょう。
昨年は伊勢灣台風が心の隅々までも黒い冷めたい風と水の爪跡をのこしていき、この世界も狂言や能の上演は殆ど中止となりました。春から夏にかけては、いろいろのそれを明記すべき思い出があります。にぎやかな「花折」など。京都から十一月に、美術祭参加の新作「雪まろげ」が放送されました。狂言と能が一体、いや狂言が主となつてえがきた作品の現代感覚はなかなかおもしろいものでした。
今年もうんとがんばりましょう。わざをみがくうえに心持もしつかりと。うけついで遺産からまづ横ぼうにつとめ、長い伝統から試練をへた狂言の思想をうけつぐことです。工夫公案、戒心以上に芸術精神を高くもつて。そこからで新年を祝福する「末広」の明るい笑声がします

たての線と横の線

佐藤 秀雄

伝統芸術として長い歴史を誇る能も狂言も或は文楽にしても歌舞伎にしても連綿として流れ來つた舞台芸術には強い一本通つた線があるのです。
只古いから尊かつたり伝統が長いから珍らしい計りではなく時代を越えて人の心をとらえて來た何かあるはずでそれが何であるかを研究探策するのは学者諸賢にお任せすべきでせう。
しかしそれが特殊な體に閉じ籠つて各自が旧態依然として保存されて來た。その根本は能、狂言では家元制度であり、又は師匠と弟子家の關係で

あり、因襲であるのだが良い面では
 伝統を守り、悪い面では革新を防いで
 いるのです。

その為若い人々は悪い面のみを取上
 げて、ゆがめられているとか、生きた
 生活から離れてしまっているとか、視
 野がせますぎるとか、種々の文句が出
 るのですが、家元制にも決して悪い面
 のみではないはづ、家元制度は成る程
 封建制の名残或は改革されるべき制度
 かもしれないが之があつてこそ現代ま
 で伝統を守りぬいて来られたのであつ
 て成程種々と考えればあながち家元制
 度のみの功績とは云へぬでせうが、押
 さえつけられた封建制度下に、武家の
 被護をうけたと云つても此確固たる伝
 統の座あつてこそ初めて生きぬけたと
 云えるのではないでせうか。

我々日本人は今の今まで押さえつけ
 られた圧制下に僅か乍ら自己を主張し
 て生きて来たのだから此時代の人々に
 はその価値の評価も出来、制度として
 の家元を認め得る、考え方が出来るの
 だ。しかし戦後派の若い人々では又考
 え方も変つて来るのは当然でせう、し
 かし世襲の家元ではあつても、芸道は
 きびしい世界、たとへその流では家元
 として盛り立て、も、伝統芸術である
 以上芸道の家元としての芸が、他より
 劣るとしたら之は排除され敬遠される
 は当然である、昔なれば芸はナマクラ
 でも権勢により一流一派に君臨するこ
 とが出来たとしても、今ではそんな甘
 い考へ方をもつた弟子も居ないだらう
 し、又そんな事だつたら、制度として
 の家元であつても矢張り若さに於て古
 参の者から突込まれるはづである。
 一流の家元として立つ人々は矢張り
 修業にも対人関係でも他流との交流に
 もそれ相当地鍛えられいぢめられ立場

の上、苦しいつらい環境に置かれて
 初め、それを乗切つて一人前となるの
 で、その上で初めて芸の枯れたさびの
 ある芸域に上達する、そして人間の
 も芸事上でも完成された上でこそ制度
 の伝統の上に統卒が出来ようになる

御 礼
 昨秋能楽協会名古屋支部主催の伊勢
 台風義援能は支部員の努力によつて
 収益金拾万八千円也を得て朝日新
 聞社を通じ日赤愛知県支部に寄託致
 しました。
 御賛助下さいました皆様には厚く御礼
 申し上げます。
 能楽協会名古屋支部
 支部長 田鍋惣太郎

伊勢台風義援能收支報告書

収入の部		支出の部	
券代	98,200	料子	14,000
員附金	102,400	東装	19,500
会寄朝日	5,000	狂言	5,810
		雑費	1,700
		信葉	15,020
		茶場	12,010
		券手	18,200
		見舞	9,260
		計附	2,000
	205,600	義	97,500
		寄	108,100
	205,600		205,600

のではないだらうか、こゝに初めて
 の線が完成する。あの武家の被護が
 無くなつた明治維新の混乱期に、没落
 の一途を辿つた此能狂言界に一部の
 々が此芸術に打込んだ精神と情熱、し

かし其際でも伝統を、踏み外さ
 なかつた良識と、黙してを守り統
 けて来た家元制度の土台は、此芸事の
 主軸として孤軍奮闘、身も魂も打込ん
 で必死に戦つた努力の結晶が今日の隆
 盛をもたらしたとは思へないだらう
 か。

そうなる先覚者達の努力の地盤の
 上でその賜を受けて楽々とよい条件の
 下に太平楽を唱える現代の若い人々が
 一諸になつてカビの生えた伝統だの、
 ゆがめられた封建制の名残だのと、古
 典を抜け出て新らしく伝統と対決せよ
 等と云ふのは少し行きすぎではないだ
 らうか。

新作も結構だが、新作としてこれま
 で発表されたもので古作をしのぐ物が
 あつたらうか、芸術的衝動によつて
 生れ、それに支えられた芸術的香気に
 よつて磨き上げられた作品こそ、新作
 としてとり上げられるのではないだら
 うか。

進取的な若い人々は進んで之に休当
 りして行く、茲にこそ芸の前進がある
 のだ、しかし前進而新らしく優れた
 ものとなつて行く事は既に伝統を離れ
 て行く事となるのではないだらうか、
 そして優れたものは又新しい伝統の
 歴史を作つて行く事となり、或は古き
 ものと新らしきものが統合されて合流
 するとかして行くのだ、之は時の流れ
 と指導者の熱によつて定められる事、
 丁度能から歌舞伎へ狂言から日舞へと
 り入れられ消化されて前進し時代に副
 つて改良され完成されて行くのだ。過
 渡期に立つ芸能界の改革運動は一概に
 悪いとは云へず、此精神こそが芸術を
 革新させ、より優れた伝統を培ふ母体
 となるのだが、新らしい芸術を生み出
 すその根源の芸術の伝統を忘れては本

賀正

ふじや

河文

電話代表 一三八一番

トヨダビル

地下二階

電話 〇〇一六八番
〇〇二五八番

とやな

船津屋

電話名代表 一八八〇番

末転倒といはねばなるまい。
近頃しみよよく見せつけられる先
占権の問題、他人の迷惑、他人の都合
のこと等少しも考えない、味気ない利
己主義がはき違えられた個人主義とし
てのさばり返っている社会情勢。之が
伝統芸能の社会にも種々の批判を受け
る原因になつてゐるのではないらう
か。

こゝに横の線が必要となつて来るの
である、各流がお互にエテケツトを自
分達丈けの間で守るだけでは発展はな
く益々冷たい関係がのびてゆくのみであ
る。之を共に聯繫をとつて行く事こそ
大切ではないだらうか、それによつて
こそ縦と横の線が織りなす伝統の織物
が完成される、横の線の増強こそ大切
である、しかし未だ未だそこ迄考へて
行動される人々の少ない事は斯界の為
心細い事と何とか此事について今少し
強力な措置が望まれるものである。

古書検

歌村彦四郎

文化九年「花子」相伝のことがあり
ますので左に。

文化九年申二月四日
三宅惣三郎伴同性乙九郎家芸出精ニ
付此度花子伝授在之尤先年より追々
願在之候処元貞大人御了承在之右ハ
直伝致度トノ事ニテノビノニ相成
居此度手前舞台開ニ付下向致追々家
業出精の様子右願ニハカ、ハラズ、
此方ハ相伝ス則二月四日。
家芸御祭日故神前ニテ其段申渡ス
免状ハ同二月八日ニ相渡ス。
神文礼ハ上京之上申越シ候由此度ノ
免状ハ文言少シ差別在之。

相伝之一書

一花子

右花子狂言〇為秘事出精依
不浅所相伝之者也

為後鑑如件
文化九年 山脇四郎元業

申二月四日 山脇和泉元貞

三宅乙九郎殿

右之通相認八日乙九郎ニ渡ス今年乙

九郎三十八才之由。

又次に舞台開の節の花子の装束着あり

今、文化九年申二月四日初日ニテ手

前舞台開の節元貞大人花子御勤之処

去秋三ヶ日御能之節御勤間モ無之今

般御勤ニ付此度ハ去秋トハ違装束替

御勤被成ル

申入前 出立

襟白 着付熨斗目 白トノ小段島

上モギドウ 長袴 小形花色小紋

侍鳥帽子着ル小刀サス 扇持出ル

申入後 出立

襟前ノゴトク白其次ニ紅地縫箔

是ハ又三郎所持ノ紅地、扇ノ縫

箔地也右紅地箔ノ上ニ御次御装

束ノ段替、波ノスリ箔ヲ着、右

箔ノ右ノ肩ヲヌギ、下ノ紅地ノ

着ル、素袍モ右ノ肩ヲヌギタ、

着ル、素袍モ右ノ肩ヲヌギタ、

ミ腰ニハサミコム、サバキ髪常

ノ通也、(以上)

二月の予定

二月七日 杏露会(初回)

二月十四日 観世会

二月二十日 辰巳追善能

二月二十一日 辰巳追善能

二月二十八日 たなびき会 唯子会

二月二十九日 霞会にて

十一月二十九日 霞会にて

新年賀謹

一 河村 証二 会

石 井 孫太郎 会

博 勝 会

藤 門 会

長 生 会

竜 吟 会

霞 田六郎兵衛 会

潤 水 会

観 水 会

観 野崎 会

高 安 会

たなびき 会

名古屋能楽鑑賞会

名古屋能楽俱樂部

杉村 真太郎

風 韻 会

幸 友 会

掬 水 会

曲 水 会

金 竜 会

春 鶯 会

正 楽 会

松 謡 会

祥 雲 会

清 風 社

掬 水 青陽 会

能楽協会

名古屋支部

支部長 田鍋惣太郎

狂言 共同社

(イロハ順)

狂言

狂言人語 歌村彦四郎

今年は黄金の六十年とか申しまして、社会情勢もよいらしいです。東京ではこの一月中に翁つきの能が、七回も催されましたが、地方ではの感がいたしません。

しかし名古屋においても大きい催しがつぎ／＼と予定されております。今月の辰巳師先代の追善能をばじめに、三月十三日には第二回朝日狂言会が、和泉流の若き家元を観る会として大曲「花子」を演じます、何卒御鑑賞を願います。

三月二十日には桜間弓川翁の追善能が金桜会として催されます。

三月二十七日には中日五流能が文化講堂に第五回を開催、狂言には新作「彦市はなし」と大藏流のみにある「鬼が宿」東西の若手の出演であります。

五月一日には中部金剛会の竹市師追善能があります。

五月五日には淡交会の橋岡能。

五月二十二日には柴田初太郎翁の金婚式祝賀能で、五十年の枕によせて自身「邯鄲」を舞い、令息には金婚によせて「金札」を舞い、借老の契りを祝ふ目出度い催しであります。

五月二十九日田鍋師の鑑賞能には梅若六郎師の道成寺では何十回目かの鼓を、勤められる由これもまたまことに目出度いことであります。

昭和35年2月1日発行
発行所
名古屋市中区奥門前町5/2
井上重兵衛方 電1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社地上社 電1196

第二回朝日狂言会 (和泉流の若き家元を観る会)



花子 和泉 保之

昭和三十五年三月十三日(日) 午後一時
於 熱田神宮能楽殿
講演「これからの狂言」
高木市之助

狂言組
鬼瓦 河村 丘造
鎌腹 三宅 藤九郎
縄ない 井上松次郎
花子 和泉 保之

首引 佐藤卯三郎
石田 喜樹

指定会員券
A 四〇〇
B 三〇〇
C 二〇〇

取扱 朝日新聞社企画課 電話八三三〇
朝日新聞社五二井上
中區奥門前町三十一
千種区内山町三十四
各百貨店 プレインガイ

主催 朝日新聞社
狂言共同社

二月の俵能

二月七日 杏譜会
二月十四日 前十一時 観世会(初回)
神歌 林 懋藏 困枝 照清
ハシ高砂 柴田初太郎
忠度 シテ観世 元昭 ヲキ高安 滋郎
ハシ羽衣 橋岡久太郎
松風 シテ観世 元正 ヲキ西村 弘敬

狂言種酒 佐藤卯三郎 井上礼之助
仕舞 卷絹 山本 博之
土車 大槻 十三
野守 岡 久雄
ツレ柴田 収
善界 武田太加志 ヲキ西村 欽也
井上松次郎

二月二十一日 辰巳孝一郎追善能
海人 シテ近藤 乾三 ヲキ西村 弘敬
井上礼之助

二月二十八日 たなびき会 唯子会
狂言 呂蓮 佐藤 秀雄 河村 丘造
井上松次郎
大原御幸 シテ宝生 九郎 ヲキ高安 滋郎
ツレ野口 録久
辰巳 孝 佐藤卯三郎
半能石橋 宝生 英雄 ヲキ西村 欽也

狂言の解説 (歌村彦四郎)

榎の酒(ひのさけ)
有徳な主人、山一つあなたへ出かけるにあたり太郎冠者には米蔵を、次郎冠者には酒ぐらを預けて、よう留守をするようにと言いつけて行きます。

留守を預かった兩人、酒が呑みたい一念から窮すれば通ずるで、蔵から蔵へ榎をかけて呑み出します。例によつて太郎冠者次郎冠者の横着

呂蓮(ろれん)

諸国修行一所不住の旅の坊主でござる、一夜の宿を借して下されとフト泊つた宿の停主、坊主の有難きうな法談を聞くうち、ついに自分も坊主になつて後生を願ふことに決心して、剃刀をあててもらつて出家をしてしまします。

女房がこの姿を見てびつくり驚天し大事の停主を坊主にしておつて、元のように毛を生やせ／＼とわめきちらします。これも恐妻型の一とこまであります。

狂言初心 (2) 野村広二

二度正月を迎える日本人。今年は一二月二十八日に旧の正月をむかえるが、二月になると、節分、そして梅のたよりをそろそろきくころになる。自然と対立せず、自然の中で「七つ」の斗争をしてきた日本人には、花を知る季節感と芸術をむすびつける気持がつよい。

能では、まづ「簾」、「東北」、「弱法師」、これには下村観山のかいた立派な屏風絵がある。またこのほかに梅そのものをあつかう「梅」、「梅枝」、それに武家の生活感情をとおして日本人の風流さをうつつした「鉢木」など。「東北」の冷めたい品のよきはわたくしの好むところだが、桜にちなむ「道成寺」や「西行桜」、「鞍馬天狗」、また月の「松風」にくらべて能采フアンの好悪はどんなものだろう。

さて、狂言の方では、「庵の梅」が脚本集にみあたる。狂言は能ほど季節感に左右されず、自然描写も少ない。それにしても、「節分」の曲にどこか

梅の匂いがあたりをただようようゆかしい。この字をまたはゆかりの字をタイトルにもつ曲に「鶯」、「梅の宮参り」、「茶子味梅」(チャサンバイ)がある。

若いひとたちは梅に関心によせなくなつてきているらしいが、梅の一輪はまことに芸道のきびしさをあらわして余すところがない。そういつたかわりようは狂言や能の世界にもみられる。本年も新年早々から、論壇は狂言に対しかつばつ、外国からの問合せもさかん。いままでの考え方とちがったみかたが、やはり、世阿弥に対する反論につながつて、新しい波をつくつていく。狂言を能からひきはなそう、幽玄とか、能の世界の中だけに閉じておこないでおこうと。狂言は品のあるおかしさだけではないというのである。

狂言はむかしの平易なことばで、今でもわかる人間の真実をえがくもの。舞台一杯に、ことばとしくさとうたで、喜怒哀楽と、善意や偽善の中に、日本のユーモアが封じこめられているもの。これが狂言の世界です。そのとき、技、神に入れば「梅は匂い」、「紅梅はぬれて見事や」とか「梅花に月」といつた高く、品よい境地が生れるでしょう。舞台マンはこれを勇猛心と自信をもつてかく得せねばなるまい。

ありし日の水雲会 歌村彦四郎

昭和のはじめごろ水雲会と申す一騎当千のつはものゝ一団が能楽界にありました。

春は花秋は月と、あちらこちらとうかれましたものであります。この連中が昭和四年の乱能に狂言「花折」を演じたときの写真であります。中には故



人の三浦其中、金剛流の小野、観世流の飯田巴、植松録造、高橋、武田の諸氏も見えます。中でも林源蔵氏の若い顔はいかゞです。この花折のけいこことよせて何たびか飲み歩いたことでもあります。

まことに世の中は天下泰平でありました。ア、夢よいま一度と云うところで。実はかく云う私もその悪友仲間の一員でありました。

三月の予定

三月六日 掬水青陽会

能 田村

〃 班女

三月十三日 第二回朝日狂言会

三月二十日 故弓川師追善能
能 清 経 桜間 道雄
〃 隅田川 桜間 竜馬
〃 葵上 本田 秀男
狂言 悪太郎 佐藤卯三郎
三月二十七日 中日五流能

楽師協議会より

一月十日学生能にて戸田秀雄氏能祖討曾我の小鼓抜キ(田鍋惣太郎社中)
同日富田悠記子竹生鳥のシテを抜キ、同日岩津宗甫氏夜討曾我のシテを抜ク(内藤泰二社中)
一月十五日清瀬会能にて鶴銅恵子さん小鼓抜キ(田鍋惣一郎社中)同日伊勢信雄氏竹生鳥のシテを抜ク(殿島修二社中)

新城に能楽社と能楽協議会結成 歌村生新城の能楽の歴史は古い。今より約三百八十年前、長篠合戦に大功のあつた奥平信昌が当地に築城し、翌天正四年竣工のお祝いに城二の丸に徳川家康を招いて、観世与三郎の能を演じたのが当地の能楽の始めである。慶安元年に丹波国龜山より、菅沼定実が当地に移封された、この人は能楽を愛好した風流人で其の子菅沼定易、其の子の定用の家督相続を祝つて天文元年八月富永神社の例祭に、社前に能を奉納したのが恒例となつて、以後毎年本町の氏子が奉納し、これを伝承して連綿二百二十年の今日に及んでい。これが現在新城市指定無形文化財たる祭礼能であつて、この団体が在来の喜多流と和泉流狂言の新城能社である。この能楽社は神社境内に立派な能舞台と、古雅な能装束を保存管理している。古雅な能装束を保存管理している。

明るい暮しの設計に……

通産大臣賞受賞
J I S 合格品
最新型HL2-B245型

世界の有名品

ブラザーミシン

狂言

昭和35年3月1日発行
 発行所
 名古屋市中区栄門前町5/2
 井上武兵衛方 電話1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 株式会社 地上社 電話1190

狂言人語

共同社
 歌村彦四郎

◎朝日狂言会に招じた 三宅氏父子のこと



和泉保之助氏



三宅藤九郎氏

名人を輩出した名家である、この藤九郎氏の長男が和泉流宗家を継いで現在精進をつづける和泉保之氏であり、また父藤九郎氏の薫陶をうけ最近特に進境が見られます。
 今回朝日狂言会に和泉流本拠の地、名古屋において大曲「花子」を発表することは誠に意義あることと思えます。狂言愛好のみならずまご御後援の程

をお願いいたします。

◎中日五流能

三月二十七日県文化講堂に於ける中日五流能は、さすがに大新聞社でなければ出来ない豪華な番組であります。其の努力に対しても地元の関係者は大いに応援すべきだと思ふ、盛会を祈ります。

◎故櫻間弓川先生

三月二十日故櫻間弓川先生の三年にあたり、親しみの深い当地で追善能が営まれるについて思い出すのは、私の父初代井上菊次郎在生のころ、伴馬翁に

三月十三日 午後一時
 於 熱田 神宮能楽殿

朝日狂言会

(和泉流の若き宗家を観る会)

主催 朝日新聞社
 狂言共同社

伴はれて当時金ちやんの金太郎氏が末広町の宅へ時折りお見えになりました。道々歩るくにも便所へ行かれても、口の中では謡のけいこです。唯頭の中には能以外のものは無ったのではないかと思はれます。
 伴馬翁亡きあとまただ芸一筋の虫のよくな方でした、いづこの楽屋でも能、狂言に抱らず鏡の間からじつと見つめていられる姿は実に頭がさがる思いでした。

かくてこそ流義を越へ 愛される弓川師惜まれる弓川先生であつたのです。

三月の催能

- 三月六日 掬水青陽会 前十一時
 能 田村 秀雄 西村 欽也
 狂言 班女 佐藤 秀雄
 三月十三日 朝日狂言会 后一時
 狂言 鬼 瓦 河村 丘造 佐藤 秀雄
 鎌 腹 三宅藤九郎 和泉 保之 右近
 縄ない 井上松次郎 井上礼之助
 花子 和泉 保之 井上松次郎 三宅 右近
 首引 佐藤卯三郎 石田 喜樹
 三月二十日 故櫻間弓川 追善能 后一時
 能 清 経 櫻間 道雄 西村 弘敬
 狂言 悪太郎 佐藤卯三郎 井上松次郎

狂言の解説

蜘蛛人(くもぬすびと)

連歌好きの好人物、連歌の会の当番に当つたが貧しいのでその用意も出来ぬまま、有徳な人の家へだまつて物を借りて忍び入る。

亭主に見とがめられて逃げ込んだところが蜘蛛の巣の中、主も連歌を好むので上の句をよまう程に下の句を讀んだら命を助けると一蜘蛛の家にかかるやさしき盗人を」と読み盗人が「さるもさるれずさがに糸」とつけました、気のあつた二人は夜中酒もりをして、みやげをもたせて返します。
 庶民のうちに連歌がはやつたところのおだやかな風景を現はしております。

悪太郎(あくたろう)

大難刀を振り廻して伯父にどつく悪太郎ぶりを肯せる前段と、酔夢の間に髪を剃られ坊主になつてからの後段のとばけた風体を御覧下さい。

狂言不審議の中の節分について

佐藤 秀雄

蓬来の鳥の鬼と云ふ事の説明に熱田神宮の事が記載されていますので一寸抜出してみます。

足利義政公富士見下向の時、釈尊孝紀行に云、熱田の宮の神前に詣で、御道筋の御祈りなど申侍りき、昔日本武尊東夷征伐の為此さかいに越さ給ひし時よぎり道し、伊勢大神宮にして倭姫の命にまかり申給ひしに命のさつけ給ひし靈劍も此神に止まらせおわしますと

能 隅田川	能 龍馬	能 滋郎
能 葵上	能 秀男	能 滋郎
能 三月二十七日	能 井上礼之助	
能 前九時半		
能 第一節	能 梅若万三郎	能 彌一
能 教 盛	能 茂山千之丞	能 野村 万作
能 彦市はなし	能 野村 万作	能 野村 万作
能 住吉詣	能 野村 万作	能 野村 万作
能 青衣女人	能 野村 万作	能 野村 万作
第二節	能 野村 万作	能 野村 万作

指定席 四〇〇〇円
 BA 三〇〇〇円
 会員券 二〇〇〇円

かやいとやんことなき神明鎮護國家の誓も頼母敷覚え侍りて

なを守れめくみ熱田の宮柱 たつことやすき旅のゆききを艶孝

君が為老せぬくすり有といへば

けふや蓬が嶋めぐりせん 艶孝

尾州熱田明神南面海蔵門の内、不実梅内の天神祠あり、昔唐の玄宗皇帝四百

余州を治め此日本をとらんと計給ふを当社の御神しろし召して仮に楊貴妃と

現はれ世を乱し給ひければ日本を取事叶はず、貴妃は馬魏ヶ原にて高力士が

為に空敷ならせらる。方士楊通幽と云者を四方へつかわして其魂魄を尋ねら

れしに日本蓬萊山におわしますとて、当社に尋来しと。吉則内天神とは楊貴

妃の靈を祭る也とぞ、仙伝拾遺を引いて晁風集にも此事載たり。又東海瓊華

集には秦の徐市始皇の詔を受けて不死の薬を求んとて日本へ渡り、熱田神祠

是蓬萊宮宮也と記されたり。焦氏筆乘日、日本国名倭国。東北数千里有山名富士。又名蓬萊。史記卷一百

一十八、淮南王伝云、秦皇帝使徐福、海神之告至蓬萊山。延年益寿薬求。我

楚六帖、宗学士が日東の曲にも、褒て蓬萊山骨所記の熊野、尾の熱田、不二山とあり。

狂言 初心 (3)

野村 広二

今年ももう三月に入る。狂言や能の方

方も一、二月にくらべ、東西で大きな催しのあることが告げられ、旅に出た

い心がしきりである。この月には毎年奈良の薪能にかけていたが、兩三年

はいけずしまいになつてゐる。その頃東大寺二月堂の修二会の行事がある。

どちらも芸能愛好家は一度はみておくべきもの。これは興福寺の古儀であ

る。近鉄で、電車が走るにつれ、左右の麦の青に心がはびむ。八木から西大寺まわり、十三日の夕刻までにつく。

まだ菜の花にはほどとおい季節。翌十四日、春日さんをたづねる。十四日が

初日の薪能はまづ春日の社前で「翁一金春で。丁度社頭の白と紅の梅が真盛

りである。これが呪師走り之儀である。三時から南大門の儀とよばれる行

事が興福寺の境内でおこなわれる。野外能である。ある年、三宅、北岸、武

智の諸氏と、待つ間をそばの茶店でわらび餅をたべ、能の中で狂言方の役な

ら何がいいか、放言しあつた。自然居士、いや三井寺、いや藤戸、いや蟬丸

のなかの博雅の三位がいいであろうなど。僧兵のふくホラ貝の音ではじま

る。みんなたのしそである。いつもどちがいのんがりしている。おもしろ

そうである。夕方になると、火がはいつて、舞台を中心に周囲が生きてく

る。奈良の夜は寒い。雨がふつて宝生の巴を東金堂の軒下して、傘をさし

てみたことがあつた。二日目は春日若宮の御社上りの儀、金春で「狸々」

を。そしてまた南大門の儀。今年はいきたいとおもつてゐる。

おもしろくみることも、またみられること、これが狂言や能の世界には余り

問題とならない。しかし大事なことだ。薪能がくるたびにいつもこのことを心でくりかえすのだが。

四月の予告

四月三日 故竹市師退善竹韻会

能 雪 花木 和代

能 耶 伊藤嘉幸子

能 夜討曾我 難波 昌広 荒木 巖

能 大藤 内 河村 丘造 佐藤 秀雄

能 論 井上松次郎 大野 弘之

四月十日 能楽クラブ(素人能)

能 三輪 草子洗

能 不 須 佐藤 友彦 山本光次郎

能 四月十七日 第二回観世会

能 藤戸 浦田 保嗣

能 熊野 観世 喜之

能 山姥 柴田初太郎

能 竹の子 佐藤卯三郎 井上礼之助

能 四月二十二日 九草会(於松坂屋)

能 昭 君 観世 喜之

能 盆 山 河村 丘造 佐藤 秀雄

能 四月二十三日 観正会(於松坂屋)

能 小袖曾我 佐藤 秀雄

能 歌 争 山本光次郎 大野 弘之

能 四月二十四日 大観節古稀祝賀能

能 木 曾

能 小鍛冶 井上礼之助

能 蛸 牛 野村又三郎 井上 誠賢

藤田流唱歌集刊行

古来囃子に限らず伝授は口伝であつたが、笛以外のものは漸次公開されてい

る、今回愛好者の要望に答へ家元が一切を公開、之が刊行の運びとなつた、御希望の向きは左記へ。

名古屋市中村区龜崎町四ノ二〇 藤田流唱歌集刊行会(電〇六五九二)

薬師協議会より

恒川志やう子さん一月三十一日竹韻会に囃子シテを披く(杉村社中)

浜村園子さん二月二十日辰巳追善会に能「杜若」シテを披く(内藤泰二社中)

高橋瞭一氏二月二十八日たなびき会に囃子シテを披く(河村 二社中)

プレス、鋳金、熔接、製罐及び機械加工

資社 スイ ト ウ 製作所 合会

名古屋市瑞穂区熱田東町神明前六八 電話 〇八三一 番

凡ゆる工場用品御用達

水 藤 商店 機械 器具

名古屋市熱田区神戸町一五一番地 電話 〇代表 5231

狂言

昭和35年4月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5ノ2
 井上重兵衛方 電話1430
 名古屋狂言共闘社
 印刷所
 株式会社 地上社 電話1190

狂言人語

歌村彦四郎

○盛況だった朝日狂言会

三月十三日朝日狂言会は和泉流宗家父子を迎へ開催満員の盛況であつたことは一重に御同好諸氏の御援助の賜ものと社中一同感激いたしてをります。

宗家保之氏の「花子」さすがに家元の風格をそなへ、その賢美さに前途を期待するものであります。

三宅藤九郎氏の鎌腹、練達のうへの酒脱、皮肉のうちに力が見られ老功の一語につきます。

名古屋勢も河村丘造氏佐藤秀雄氏のコンビでの「鬼瓦」は名古屋の和泉流の伝統がしのばれ先代健三郎氏が出て来られたようであつた。

「縄ない」は第一線に活躍する井上松次郎同礼之助、佐藤卯三郎氏の助演でエネルギーを一パイに放出しての熱演、現代的な名古屋の狂言を見た。切りの「首引」に至っては名古屋名物の少年狂言、井上家の筋をひいた石田喜樹(十一才)が鎮西八郎になつて社中慰出の賑やかさ訳もなく狂言の面白さを画き出した。この数鬼の面が沢山に保存されていることも共同社自慢の一であります。

来年のことを云ふと鬼が笑います。が、又趣きを替へて見参いたします。何卒相変らず御後援の程を御願いたします。

四月の催能

四月三日 故竹市追善脂 竹謡会

能 郎 耶 シテ伊藤嘉奈子 ワキ西村 弘敬
 能 雪 シテ花木 和代 ワキ高安 滋郎

能 宗 論 井上松次郎 大野 弘之
 能 夜討曾我 シテ難波 昌弘 ヌレ花木 巖

能 四月十日 名古屋能楽倶楽部公演
 能 三 輪 シテ川村 英雄 ワキ西村 弘敬

能 草紙洗 シテ藤本弥治郎 ワキ高安 滋郎
 能 不 須 井上松次郎 山本光次郎

能 高 砂 シテ岡田 頼充 ワキ西村 欽也
 能 四月十七日 第二回観世会

能 藤 戸 シテ浦田 保嗣 ワキ高安 滋郎
 能 熊 野 シテ観世 喜之 ワキ西村 弘敬

能 山 姥 シテ柴田伸太郎 ワキ西村 欽也
 能 竹の子 井上松次郎 井上礼之助

能 四月二十二日 九皇会 (於松坂屋)
 能 昭 君 シテ観世 喜之 ワキ高安 滋郎

能 盆 山 河村 丘造 佐藤 秀雄
 能 四月二十三日久田親正会 (於松坂屋)

能 小神曾我 久田 秀雄 柴田 収武
 能 歌 争 山本光次郎 大生 弘之

四月二十四日 大観師古 賀能清韻会

能 木 曾 シテ大槻 十三 ワキ高安 滋郎
 能 前 大槻 秀夫 後 敷世 喜之

能 小鍛治 ワキ西村 弘敬
 能 四月二十九日 幸友会春奉大会

能 乱 シテ辰巳 孝 ワキ高安 滋郎
 能 宗 論 (しゅうろん) 歌村彦四郎

能 法華と浄土の二人の僧、一人は身延の
 能 掃り、一人は善光寺の掃りに出あい、途
 能 よき途づれとして発足しましたが、途
 能 すがら各自の宗旨の功徳を云ひ争い
 能 一つはてるとも知れぬまに、互のお題
 能 目をとりちがへ「法華も弥陀もへだて
 能 はあらじ今よりのちは二人が名をく
 能 妙阿弥陀仏とぞ申しける」と誦い納め

能 不 須 (ぶす) 歌村彦四郎

狂言の解説

歌村彦四郎

て勝ったぞ……いつの世代にもあ
 る横暴なエゴイストの話で、屁りくつ
 と片意地な態度が笑はれます。

盆 山 (ほんざん)

盆山の好な男、どうしてもほしい盆山
 を断りなしに借りて来ようと、有徳な
 人の家に忍び込みます、ところがそこ
 の主人に見つかつて盆山のかけに隠れ
 たが盗人を知人と知つた主人はいろい
 ろとなぶるうち、あれは鯛ぢやと云は
 れてひれの代りに扇を立て、びれに見
 せたまではよかつたが、鳴けと云はれ
 てさあ大変、何と鳴きませうぞ。

歌 争 (うたあそび)

野遊びに行く筈の二人、一人が自慢の
 芍薬を見せて、風流振つて吟じた歌「
 難波津に芍薬の花冬ごもり、今を春べ
 と芍薬の花」と云ふので相手は大笑い
 それこそ「咲やこの花」の間違と云は
 れ腹を立てたが、今度は土筆を見つ
 けた相手が「春の野に土筆の首しほれて
 ぐんなり」と吟じたそれは慈鎮和尚の
 歌「我が恋は松を時雨の染めかねて、
 真葛が原に風騒ぐなり」とあると云ひ
 張りあげくの果相撲になるが。

蝸 牛 (かたつむり)

長寿の薬になるかたつむりを取って
 るように云ひ付けられた太郎、藪の中
 に寝てゐる山伏を蝸牛と間違へ山伏
 になぶられて、でんくむし」とは
 やし入る狂言独特のおかしみを。

狂言 初心 (4)

野村 広二

舞台上で狂言や能が事なく運んでい
 て、いいなあ、きれいだなあ、おもし
 ろいなあと心動かされるとときと、そう
 でないときとがある。いつころにおも
 しろくなく、興のわいてこないことが
 ある。演者のわがが下手だといふので
 はないのに。勿論役者の演じ方がみる

側よりもはるかに高いためとか、孤高のシテとかいう場合でなくて、その日の演目から目当にしていた太郎冠者が舞台にあるときである。何かをつかもうとして、心算しもうとして、考えようとしても、一瞬一瞬すんだ水のように流れ去つてしまふに似ている。世にいうブラスアルファがないからである。花がないのである。わざの見事さはつとするような瞬間、美しさ、人生最奥の世界をのぞかせたようなせつな、そして全体が心よくまとまつた出来、こういつたいろいろのものがある。ものがないといえよう。これというもの、わざ―芸をみせるだけではないのである。登場人物の全員が舞台の上で狂言を、能をするのだという、最も初歩でわかりきつたことに徹しきらねばだめである。しかもこれが至難のわざである。そしてみる者の側には、これに好ききらい、流儀、先生えの義理がからまつて、ややこしいものに出来て上つてしまふ。「狂言」や「能」をみるのだが、実際は先生の姿をおい、ウタイをおぼえることがまず第一になる。そして演ずる者がいかに大きな賞賛をかちえても、二度くりかえすことは出来ない。やるまいぞの声を太郎冠者はうしろに幾度も幾度も橋掛りを走り去るのであるが、けれどもみる側はこの感銘、この感動を何度も心におもいおこすことは出来るのである。

三月の例から拾うと、三宅藤九郎が「鎌腹」のおわりでみせたしめくりの方、「悪太郎」後半（井上、佐藤）のいきのあつた動き、能では桜間道雄の清経の出のあたり心動かすものがあつたはず。さて四月はどんなものであつた狂言や能の遍歴では、この純粋な感動がいかに大切か、一寸ふみとまつて考えてみよう。

竹生嶋参りについで

佐藤 秀雄

狂言不審紙に
此狂言詞の通り別に不審なし、おのれが非を口調法にて主人をまとわし、慮もなく空言なれば必迷惑す愆而人は空言はいわぬもの也との禁なるべし、竹生嶋は江州浅井郡湖中に有、神社考に云、竹生嶋者。江州在湖中。其巖石多水精宝珠。本朝五大奇異之其一也。伝言。考靈天皇四年。江州地折湖水始満。駿州富士山忽出焉。景行天皇十年。湖中竹生嶋初涌出云。

竹生嶋什宝。
小枝笛（義経所持）鼓筒（静所持）
弁慶吉次太刀、倭藤太太刀、天狗爪、馬角、二股竹、七ナンがソソ毛、伝教、大師景勝経主。弘法大師板名号玄上。琵琶撥、松宝童子琵琶、仁和寺寛寛僧正精数珠、土像布袋、弘法作倭藤太十、種内露硯、矢嶋御所代々系譜、此狂言因に云、竹生嶋に岩飛なし、伊崎明神に掉飛と云、今もあり、百銅にて何時にても飛、大さ成材木を出し有夫より飛ぶ也。

五月の予告

- 五月一日 中部金剛会能
安宅 大塚 一二
- 五月五日 淡交会能
揚貴妃 金剛 巖 井上礼之助
融 豊島弥左工門 大野 弘之
大般若 河村 丘造 山本光次郎
井上松次郎
- 五月七日 博勝会能
朝日奈 石田 喜樹 井上松次郎
加藤 歌子 山本光次郎

楽師協議会よりのお知らせ

- 五月二十八日 滋水会
松永勝郎氏囃子シテ披く（内藤社中）
八木定英氏囃子シテ披く（ ）
吉田ます氏小鼓披（田鍋惣一郎社中）
一月二十六日 正楽会にて
三村恵子氏囃子シテ披く（加藤錠社中）
三月二十日 竜吟会にて
富士道周氏囃子笛披く（金森社中）
中野清允氏 同シ（小島社中）
森本重一氏 同シ（同）
後藤義一氏 同シ（寛社中）
助川竜夫氏太鼓を披く（頭八郎社中）

御観光に
御商用に

名古屋駅前トヨビル南側

日本交通旅行社
日本旅行社
日本旅行社
日本旅行社

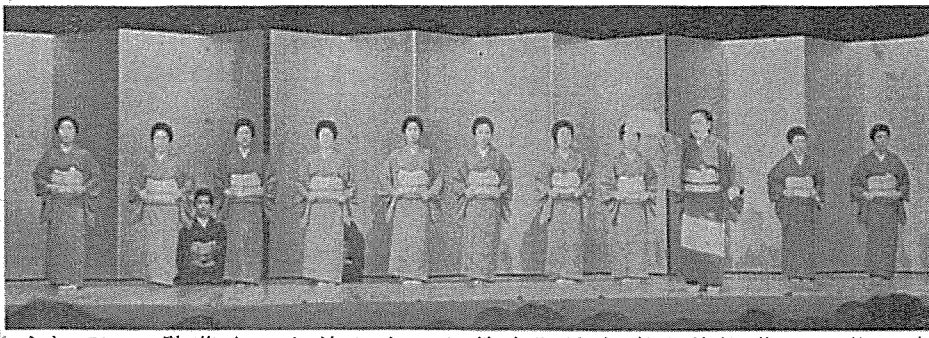
旅館 むし家

電話 1396~8

狂言

新橋の狂言

三宅藤九郎



新橋の花柳界の総帥である菊村さの御依頼によつて東おどりの人達に、狂言や小舞を教へはじめたのは、今から七年前のこの土地の芸妓は殊に芸に修行で、真剣に踊り、三味

線などの外、点茶、囲碁、箏曲、習字の社会講義も受けるという忙がしさです。狂言や小舞の稽古も時間的には年数の割に少いのです。(中略) 五年前から、毎年一回、能楽堂で、新泉会の名で発表会をもつようになり、毎回八十名から百名位の出演者があります。

級長格のまり千代さんなどは、狂言のセリフの稽古によつて、二十五日間続演する東おどりに声の嘎れる事が殆んど無くなつたと述懐しています。狂言の稽古が、芝居や舞踊のセリフの云い廻しの声の鍛練に役立つとは、かつて故坪内逍遙先生も力説され、九代目團十郎もこの理由から、驚流の狂言を習つていました。

狂言と歌舞伎、舞踊との関連は、歌舞伎の始祖といわれる出雲の阿国が、その夫、狂言師三十郎の協力で、狂言小歌や小舞を、踊り歌や振りに多く用いた、次の時代の野郎歌舞伎も「物まね狂言づくし」の名で興行したりしています。又当時の小舞十六番の流行も、これ等の影響からとも考えられます。しかしこの新橋の新泉会のように、芸妓が芸の基礎修業の一端として、狂言や小舞の稽古を、集団的に、たゆまず続けているという事は、前例が無く、いろいろな意味で注目し価値を置かなくてはならない。

(能楽養成会パンフレットより)

昭和55年5月1日発行
発行所
名古屋市中区表門前町5-2
井上重兵衛方 電話1430
名古屋狂言共向社
名古屋市中区表門前町5-2
井上重兵衛方 電話1430
株式会社地上社 電話1199

五月の伊能

- 五、一 中部金剛会能 正午
安宅 佐藤 秀雄 井上礼之助 滋郎
- 楊貴妃 佐藤 秀雄 井上礼之助 滋郎
- 大般若 井上松次郎 山本光次郎 滋郎
- 三 松詔会能 前一〇時
融 井上松次郎 太俊 高安 滋郎
- 因幡堂 佐藤卯三郎 河村 丘造 滋郎
- 五、五 橋岡先生喜寿祝賀能淡交会前一〇時
丸 橋岡 元正 高安 滋郎
- 朝日奈 石田 喜樹 井上松次郎 弘敬
- 天鼓 前柴田初太郎 西村 弘敬
- 五、八 かずみ会難子大会(田鍋社中)
井上礼之助
- 五、一五 博勝会能 前九、三〇
三井寺 子方村田 京子 西村 弘敬
- 杭か人か 佐藤卯三郎 河村 丘造 滋郎
- 葛城 山本光次郎 高安 滋郎
- 五、二〇 やるまい会 后五、三〇
雁 河村 丘造 佐藤卯三郎 秀雄
- 金 岡 野村又三郎 野村 万作
- 無布施経 野村又三郎 井上礼之助
- ぬげがら 野村 万藏 野村万之丞
- 野村 万作 野村万之丞
- 野村又三郎
- 五、二二 掬水会能
芦刈 谷野 博 高安 滋郎
- 井上礼之助
- 羽衣 植村真太郎 西村 弘敬
- 井上松次郎 河村 丘造
- 狸々 竹内 六郎 西村 欽也
- 五、二八 茲水会能 前九、三〇

合浦 観世 恵石 西村 欽也
井上礼之助 西村 弘敬
竹生島参り 河村 丘造 佐藤 秀雄
舟舟慶 井上松次郎 高安 滋郎
- 五、二九 名匠鑑賞能 后一時
俊寛 観世 喜之 高安 滋郎
- 貫 井上松次郎 大野 弘之
道成寺 梅若 六郎 高安 滋郎
- 野村又三郎 佐藤 秀雄

狂言の解説 歌村彦四郎
施主の家へ毎月神楽をあげに来る神子と大般若を読みに来る坊主とが出会い、坊主は神楽ががしましうて経が読めぬと云い、神子はお経は仏道、神楽は神道、別の事で御座る鈴の音に紛れて経が読まれぬならばよむなと云う、坊主は怒つてかまわずお経を読みかけますが、美しい神子の舞ふ姿に見られ思はず経本を鈴に見なして神子について舞い出します。

因幡堂 (いなばどう)
大酒呑みの女房にあいそをつかした夫、妻を離別し因幡堂に籠つて申妻を致します。女房はこの事を知つて因幡堂の薬師様になりすまし、西門の一のきざ橋に立つたを妻に定めよと云つて自身で立つ、夫はこれを御夢想の妻と思ひ喜び家に連れかへり盃事をする、一杯、二杯、顔色もよくなつて夫の前へ、かつぎを取つた女房を見た夫は。

朝日奈 (あさひな)
豪傑の朝日奈も一朝無常の風に誘はれ冥土へ来た、たま〜六道の辻に出張つた閻魔王が見とがめ、朝日奈と聞いて逡巡するが責めなければ地獄の名折

【写真】新橋芸妓連による狂言田植(四月十五日能楽養成会賛助出演)

れとお囃子にのつて責めます。
 杭か人か (くひかひとか)
 臆病者のくせに強がり云う太郎冠者、独りで留守番をさせられるが、夜廻りをすれば石が人に見えたりしてビク／＼、そつと帰つて暗に立つ主人の姿に「杭か人か」と問うと「杭」と返事をしたので杭なれば安心と胸なでおろし、ハテビツクリ杭がもの云う管がないが。

雁 礫 (がんとぶて)

狩りに出た大名野原にいる雁を見つけ、て弓で射んとする所へ、通りかかった男が礫を打つて雁に当てます、大名は俺が射た雁になせ手を付けるとの難題に、折りよく仲人が入り今一度大名に射させて見ることに成り、大名は精一パイ狙つて放つたが……昔の大名のとばけた横着振を描き出しております

金 岡 (かなおか)

金岡と云う絵師御殿に召されて襖戸に極彩色の四季の図を描きしとき、大ぜいの上臈たちのうちの絶世の美女に頼まれるまま扇に絵をかき参らせしよりあけても暮れも忘れられず物狂いになつてさまよう。妻は幸いなたは天に隠れもない絵師ちや程に、妾が顔をいかようにも彩色して見させられいと云うので、金岡も絵具箱を取り出して。「何とぞどれどこのつらは、恋しき人の顔には似いで、狐のばけたに異らず」と謡います。

布施無経 (ふせないきよう)

庵寺の持僧ある日毎月の御祈禱のため檀家にゆきまされたが、いつも下される管のお布施が出ません。今後にも残る問題でもありませんので、立ち戻つてい／＼と事よせて催促を致しませんが一向に通じません。坊主は遂に業をなやして自分のかけている袈裟を懐中に隠し袈裟を忘れたときかきに戻り、そのけさの目印のことから漸々布施を思

い出し、遠慮する坊主の懐に入れると引替に袈裟が現はれるおかしさ。

ぬげがら

使いに出る度毎に酒一つ下さるる管が今日は忘れられていたので、のちのため気をつけに戻つた太郎冠者、一杯、が二杯三杯となり使いも忘れてくだを巻き初めます。よう／＼立ち上つて使いは出たもの、途中で寝込んでしまいました。主人も心配して跡より見に行きますと正体もなく寝ておられます。鬼の面を着せてかへります。幸いに鬼の面はづれたがそれを鬼のぬげがらと片づけます。

啞の一声 (おしひとこゑ)

新作ものですが私は拝見いたしておりません、達者な万之丞万作氏の熱演が期待されます。

簸 屑 (ひくず)

茶を挽くよう云いつけられた太郎冠者居眠りばかりするところへ使より帰つた次郎冠者が、話をしたり舞を舞つたりしますがどうしても眠りこけますので次郎冠者も腹を立て太郎に鬼の面を着せます。外出先から帰つた主人の前へ出た太郎冠者は、鬼が出たと驚く主人に鏡を見せられてビツクリ仰天。「ぬげがら」と同形異曲なものであります。

竹生鳥参り (ちくぶしままいり)

竹生鳥へ抜け参りをした太郎冠者主人より何が交つたこととはなかつたかとおはれ神前のかたわらの芝生に珍らしいものが集つていました。先づ辰、犬、猿、かいる、くちなわ、が集つていて何れも立ちぎわに秀句を云つたと話しましたが、くちなわの秀句につまつて「石ぐらの中へぬら／＼です」とわけのわ、ぬことを申しました。

貰 蟹 (もらひむこ)

大酒呑みの夫に愛想をつかし実家へ逃げ帰つた嫁、どんな事があつても夫の許へはかへらぬとの娘の言葉に、舅も承知して娘を奥の間に隠して何があつても出ることにはならぬと定め、さて平身低頭嫁を貰いに来た蟹には知らぬ存ぜぬとうそぶくのみ。夫がくどくどと子供のことなど訴へるのを隠れ聞いていた娘、矢も楯もたまらず思はずのり出すを叱りつける舅。昔も今も変りない民主主義の表現。

樂師協議会よりのお知らせ

- 四、一〇 クラブ能にて
- 神戸 磯次氏 囃子シテ披キ (殿島社中)
- 藤本 彌次郎氏 能草紙洗披 (辰巳社中)
- 四、一四 三菱商事文化祭にて
- 戸叶 広司氏 囃子シテ披キ (河村社中)
- 香坂 大助氏 " "
- 四、一六 石井会にて
- 深尾 忠彦氏 大鼓披キ (河村惣社中)
- 川村 勝太郎氏 " (西尾社中)
- 四、二二 久田親正会
- 戸前 勝平氏 囃子シテ披 (久田社中)
- 河竹 正夫氏 " "
- 星野 路子氏 " "
- 四、二四 清瀬会能
- 井上 斌資氏 狂言初舞台 (野村社中)
- 童泉会能
- 佐藤 豊次氏 能土蜘蛛シテ披 (泉嘉夫社中)
- 維田 哲夫氏 " 蟬丸 " "
- 杉田 合子氏 " " " "
- 高槻 建吉氏 " 玄衆シテ披 " "
- 伊藤 正敏氏 " " " "
- 鈴木 慈郎氏 " 紅葉狩シテ披 " "
- 山瀬 均氏 素謡卒塔婆披キ " "
- 花村 次子氏 初囃子シテ披キ " "
- 佐橋 静子氏 " " " "
- 森川 みどり氏 " " " "

迅速丁寧必ず御満足頂ける店

御用命は

合資会社

八木紙工所

代表社員 八木直正

名古屋市中区和泉町二

電話本局 3616番

営業種目

- 青写真焼付
- 陽画写真焼付
- 製図用紙各種
- 特殊印刷紙加工
- 紙製品、巻紙 (カッター)
- 紙截、打抜
- 製本一般
- ビニール加工

狂言

昭和35年6月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5/2
 井上屋兵衛方 電話1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 株式会社 地上社 電話1196

六、七月の催能

- 六、四、梅猶会午后四時熱田能楽殿
 能阿 沼 井上礼之助 弘敬
 能隅田川 シテ梅若 鶴義ヲキ高安 滋郎
 狂言飛 越 井上松次郎 河村 丘造
 能安達原 シテ梅若 盛義ヲキ西村 弘敬
 間 佐藤卯三郎
- 六、五、喜多流鑑賞会 正午熱田能楽殿
 能黒 塚 シテ喜多 実 ヲキ高安 滋郎
 間 茂山千之丞
- 狂言太刀奪 茂山千之丞
- 六、一、和調会熱田能楽殿
 能羽 衣 シテ西川 司津
- 六、二、掬水青陽会 正午熱田能楽殿
 能加 茂 シテ柴田 牧武ヲキ西村 欽也
 間 井上松次郎
- 狂言芥 川 井上礼之助 河村 丘造
 能雲林院 シテ佐藤 太俊ヲキ西村 弘敬
 間 佐藤 秀雄
- 能安達原 シテ観世 元昭ヲキ高安 滋郎
 間 佐藤卯三郎
- 六、一九、第三回観世会前十時熱田能楽殿
 能巻 絹 シテ河村 鉦二ヲキ西村 欽也
 間 佐藤 秀雄
- 能頼 政 シテ片山 博通ヲキ西村 弘敬
 間 井上礼之助
- 狂言吹 取 河村 丘造 佐藤卯三郎
 間 シテ観世鉄之丞ヲキ高安 滋郎
- 能楊貴妃 シテ久西村 欽也
 間 井上松次郎 大野 弘之
- 能園 栖 シテ大西 信久ヲキ西村 欽也
 間 井上松次郎 大野 弘之
- 六、二六、第二回宝生会后一時熱田能楽殿
 能百 万 シテ辰巳 孝ヲキ高安 滋郎
 間 井上松次郎 河村 丘造
- 狂言雷 佐藤 秀雄 河村 丘造

狂言人語

歌村彦四郎

○統新橋の狂言(前号参照)

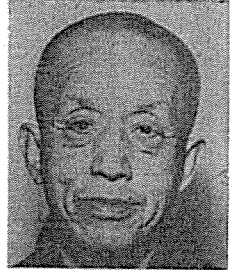
四月十五日東京新橋演舞場に於て能楽養成会記念演奏会に賛助出演として和泉流狂言、三宅藤九郎氏門下の新泉会の新橋の踊の名手、まり千代以下十数名の芸妓連が本名を名乗って狂言「田植」を演じました。舞踊の名手達が実際に狂言や能を研究し、体得して舞踊にとり入れられることは誠に頼もしいことと賛意を表します。名古屋に於ても初代西川鯉三郎氏は盛んに能と狂言を採り入れられて、今も補佐役の長老方のうちに残っていると思えます。西川司津氏が今回羽衣の能を熱田の舞台に舞はれますが、まことに結構なことと存じます。

○野村万藏家の御目出度

和泉流狂言の長老東京野村万藏氏長男万之丞氏は先きほど婚礼をすまされたが、今回次男万作氏も古川久氏の媒酌により、坂本若葉子氏と挙式せられま

した。万藏お父さんホ 御満悦のこととおよろこび申し上げます。

○柴田初太郎翁金婚祝賀能



名古屋観世流立ち方の長老柴田初太郎翁(見)

て翁の称号を呈上) 借老の契り浅からず、相助けてこゝに五十年の喜びを迎えられる。伝来の職を抛ち、自からの趣味に生き通し而も今日の隆運を得られたことは一重に同氏の生一本な灘の酒のような芸熱心の然らしむる所以と思えます。修業中の逸話は数かぎりがありませんが、うちにも最も有名なのは銭湯の洗場で洗い桶を持つて差廻しの稽古に夢中、浴客の頭をなぐるなど、広小路を歩いていてフト右手をかざしハイヤーを止めたり、その一例であります。その当時の熱心さを御想像下さい。

具文化講堂の仮設舞台に能狂言を催して参りました。今年も別掲番組の通り当地楽師総出演にて開催いたします。納涼かたゝすゞしい文化講堂で御鑑賞下さい。

各地の狂言会

○白木狂言の会(東京白木屋)

東京の有識者を委員として組織され、毎月一回開かれています。野村万藏父子が主体にて、和泉流は勿論、大藏流の狂言等を組み入れられます。

○狂言和泉会

三宅藤九郎氏統卒のもとに、稀曲、大曲を選んで上演されます。

○冠者会

野村万藏氏父子の会で時折新作物を取り上げ、その意慾をうったへておられます。

○大阪朝日狂言会(大阪三越劇場)

朝日新聞社主催にて北岸佑吉氏が企画、年数回市民劇場指定として、各流の狂言を上演されます。

○市民狂言会(京都市)

京都市主催で市の文化財として、観光事業と共に保護されております。

○狂言小劇場(京都)

茂山一派のお若い連中が、東京の和泉流の若手にも呼びかけ、新作物を大いに手がけ活発な歩みを見せておられます。

○なごや朝日狂言会

朝日新聞中部本社、狂言共同社共催今のところ年一回開催、各流の名人、名手を招き特殊な番組を企画、狂言の鑑賞、発展に資しております。

○この外に東京に大藏流家元の大藏会などがありまして盛んに各地に催されております。

○大衆普及能

毎年何かの形式で大衆に呼びかけて

大衆普及能八月十三日(土) 午後五時始

於 県文化講堂仮設舞台
主催 能楽協会名古屋支部
後援 朝日新聞社

番組

觀世 喜之 西尾孫太郎 鬼頭 喜太郎
能(宝) 小 田鍋惣太郎 藤田六郎兵衛

シテ内藤泰二 吉田 定男 寛 三男
ワキ西村弘敬 福井啓次郎

シテ柴田初太郎 河村総一郎 小島鉄次郎
ワキ高安 滋郎 田鍋惣一郎

シテ西王母 永田虎之助 野崎太郎
未定 青木 恒治 金森準三

狂言 舟山伏 河村丘造 井上松次郎
船(金) 舟山慶 鉢一 鬼頭 八郎

シテ大塚一二三 寛 後藤孝一郎 鬼頭 秀信
ワキ西村欽也 井上礼之助

祝言

狂言の解説

飛越(とびこへ) 茶の湯に誘はれての途中、小サイ川に出ました。新発意(しんぱち)は飛べぬと云う、さうあらば一所に飛ぼうと連れ渡りにします。が、新発意は水におぼれ濡れねずみになります、そのおかしさを笑ふのでまたく相撲になります。

太刀奪(たちうばい) 北野へ参詣に出た主従二人、通りかゝつた他家の奉公人が見事な太刀を持つているのを見て、かねて太刀がほしいと云う主人の心を察した太郎冠者が、この者の太刀を奪おうとして逆にこちらの小刀を取られる間ぬけさ。太郎冠者もの特有のおもしろさ。芥川(あくたか) 西の宮へ参詣の二人の男が仲よく同行するうち芥川に出

ました。川を渡るに当つて互に隠していたちんばと、手のしようがバラレてしまいました。

吹取(ふきとり) まだ無妻の男清水の観世音に申妻をいたします。即ち名月の夜に五条の橋に出て笛を吹け、その笛の音に連れて出た女を妻に定めよとの御霊夢をうけたが、自分は笛が吹けぬので知人を頼んで代つて笛を吹いて貰います。こゝで狂言一流のそとうがが持ちあがります。

雷(かみなり) 武蔵野に來たヤブ医者俄かな雷雨に出合いくわばら〜とかなでいる前へ雷が落ち腰を打つて立てないので、恐る〜雷に針を打つて針医者、強い雷が人間以上に痛がるおかしさ。天然現象の雷を天から落し腰に針を打たせるユーモラスな昔の人の感覚には驚き入ります。

彌山伏(ねぎやまぶし) 相当多人数を要する狂言ですが柴田翁の金婚を祝つて共同社の演出であります。伊勢の御師(称宜)が都へ上る途すがら、茶屋に一休みいたしましたところへ大嶺葛城より下向の意地の悪い山伏が来合せ、湯茶のことから言いがらべとなり、遂に大黒様に御うかがいを立てることとなりますが、おとなしい称宜の「謹上再拜々々」と振る御幣にかなわず、山伏が一生懸命に珠数を採めども折る大黒様は益々アテラを向けてしま

います。おかしさの一番お腹の皮が燃れる程笑はれるでしょう。梟山伏(ふくろやまぶし) 横川の小型を氣取る堂々の山伏、ふくろに憑かれた病人の加持を頼まれました。忽体振つた山伏の折りにも病人はいよ〜ふり出して、遂には折る山伏達にも伝染して、一緒に狂言で「ポホン〜」と追い込まれます。狂言ではい〜威勢のい、山伏がみじめな敗北をするのが特徴。さうであります。

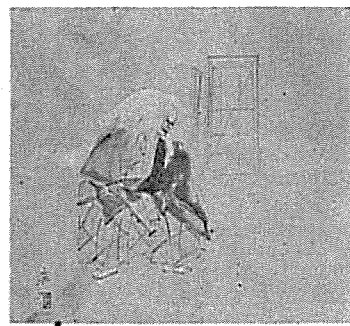
狂言初心 (5)

野村 広二

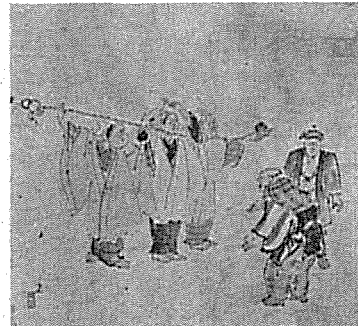
五月、六月は春の能楽界が上半期の盛んな狂言や能の催しを誇るとき、熱田の能楽殿にいくのもいよいよ楽しみになつてくる。休けいの間に熱田さんの庭園をまわつて「あかすの門」の前を能楽殿へもどつてくることである。目もさめるような緑の色が心に気持よい。かつて西側、今の交番所のあたりに、こういうとおよそ人の年がわかるものだが、昔風な大きな湯沸釜のある支度所があつた。そこでうどんをたべたことを今でも忘れない。そのうどんの味、庶民的なうどんの中にも一種の風趣があつたわけである。

狂言も、能も、「味」という日本独特の鑑賞方法がある。持味のことである。役者の芸風からちがつた味が生れてくるものである。茂山弥五郎翁と千五郎、故人の忠三郎をくらべるとよくわかる。三宅藤九郎に山本東次郎をいれたら、もつと一層各人の風格のちがいがわかる。たとえば、「木六駄」だが、弥五郎翁と藤九郎のとは味がちがつて、去年みられたはづである。青年層では、七五三、千之丞、万作、万之丞、保之とならべてもよい。みそ汗の味と同じである。各家ごとに味がちがいが、各朝ごとに味がちがう。そして、味のないものはうまくない、味の味のないものは何の感動もない。この表現力は芸術精神のきびしい修練によつてえられよう。半煮えはうまくな

い。手堅くても、表現のコースが一寸でもずれると、もうこの味はうしなわれてしまう。間(ま) 先聞後見、序破急の理論につながる。濃い目、薄味、鯛のさしみでも、いわしの塩焼でも結構。狂言の味、能の味をたつぷりと満喫させたい。



能 安達原 仙田雪山子筆



狂言 六地藏 仙田雪山子筆

能と狂言の絵の会 歌村彦四郎 仙田雪山子画伯は私の昔からの親友であります。現在京都にて箔光美術協会を主宰し日本画壇に於ては帝展から日展に続く氏の出品画は、清新な色彩感覚を以て、日本画本来の伝統を失はず朝日賞、総合展賞、市長賞と数々の受賞をかさね、また近くは復元の京都小御所の御襖絵には土佐派の麗筆をふつておられます。

最近能と狂言に親しみをもち、これが研究を重ね其の作品も充実いたしましたので、今秋には能と狂言の絵の頒布会を開く予定であります。

何卒郷土出身の同氏を御援助の程お願い致します。

事務所、千種区内山町三、電④四〇四六

十月二日 熱田能楽殿
共同社結成七十年記念能

- 囃子(三養)老
 - 内藤 泰二 河村総一郎 野崎 三男
 - 福井啓次郎 寛 三男
- 狂言
 - 末 広 井上松次郎 井上礼之助
 - 鳴 子 野村又三郎 歌村彦四郎
 - 柴田 収武 加藤丈太郎
 - 塚本 秀雄 佐藤 太俊
 - 石谷 初蔵 久田 秀雄
 - 大曾根俊治 柴田初太郎
- 子方
 - 安 宅 西尾孫太郎 藤田六郎兵衛
 - 滋郎 田鍋惣太郎
 - 山本光次郎 井上礼之助
 - 河村鉦二 太田重次郎 鬼頭五朗
 - 杉村竹翠 真柄 米次 高野瀬透
 - 六車 真三 増田 愚蔵
 - 尾関健太郎 林田一雄
- 狂言
 - 釣 狐 佐藤 秀雄 河村丘造
 - くさびら 市橋良治 井上松次郎
 - 大野弘之 井上礼之助
 - 山本光次郎 佐藤三郎
 - 歌村彦四郎
- 能(急)
 - 土蜘蛛 熊(急)
 - 立石澄雄 吉田 定男 鬼頭八郎
 - 西村欽也 田鍋惣一郎 金森準三
 - 高安守彦
- 後見
 - 中内 利一 水野 謙徳 寛一
 - 安部長太郎 松原義勝 伊藤鉄之進
 - 大羽隆司 山田仁三郎
 - 小林 忠三

主催 狂言共同社

○共同社 成七十年

記念能に際して 歌村彦四郎
「和泉流猿楽狂言記念碑」
(在名古屋西本願寺別院)

披芸宗師謂之家元又稱師家其弟子得師准教人者亦稱師家山脇和泉猿楽狂言之家元也其弟子稱師家者曰早川幸八曰山脇得平共為旧尾張藩役者山脇和泉祿百石其有差皇政維新廢藩置縣三家共編入士族於其家去亦不必須繼家元八世孫山脇和泉元賀以明治九年十一月十五日没法母珠善道善嗣山脇和泉元清繼家去而移住東京早川幸八明治十年九月二日没法母泰翁有一女無男山脇得平則繼明治十一年三月二十四日没法母德殿壽仙男山脇隆録業商不從事家去於是浪越狂言之統絶矣弟子角淵宣井上菊次郎惜之与有志数人相謀卜明治十有七年三月十六日設筵猿楽修三師追遠会角淵宣演狸鼓腹井上菊次郎演釣狐皆於其芸所貴重云既而角淵井上等議曰往昔始祖山脇和泉守元宜始仕藩祖源敬公尾張和泉流根元之地也今也遺沢寥寥將墜地如是不識後或將無可致角淵宣嘗學於余贈書請余誌之乃援筆書所聞係之以銘曰

狂言之狂 勸戒寓焉 靡非教也
孰宜其然 乃名其家 山脇和泉
源出自江 岳樂之軒 茲刊貞石
以永其伝

明治十有七年夏六月 牧山佐藤楚材撰
受業生 福岡欽崇書

宗家山脇元賀が明治九年()次いで十年に早川幸八、翌十一年には山脇得平が相次いで他界し踰えて十三年には山脇九代目元清が東京に移住という。遺沢寥寥將墜地たる和泉流根元の地に、これではと起ち上つたのが得平門下田中庄太郎、角淵新太郎、幸八門下井上菊次郎、伊勢清水、又三郎門の山本文平、河村鉦三郎その他に三橋正太郎氏が加はつて創立員となり、明治二十四年六月共同社が組織された。秋風落葉の狂言界に新風を注ぎ狂言の振興に努め維新後宗家其の外師家の装束や面など各所に売却質入れされていたものを漸次回収し之を保存することに努力した。和泉流の原本たる雲形本、浪形本等も保管されている。殊に数多い狂言面の内には、狸、見徳、狐、うそぶき、福之神、恵比壽、祖父、等の古面「痘面の乙」延命冠者等、珍重すべき面も多いのである。之等先覚創立者に感謝しその卓越せる見識に敬意を表はし併せて創立七十年を迎える今秋十月二日に上掲番組の通り全名古屋の各流能楽師籠の惣参加を得て盛大なる記念公演が出来ることを心から喜びとするものであります。

当時から見ると此頃の能、狂言の演能の多い事は格段の差であります。昔の人々と見劣りのしない芸事を見る事の少ない事も事実ではないだろうか、奮起一番先覚者にてこたえて共同社同人は芸事に邁進すべきであります。

今回特に佐藤秀雄氏が河村丘造氏の助演を得て当流の太曲「釣狐」を披露します。この狂言は肉体的にも非常に訓練を要するものであります。佐藤氏の努力で必ず立派な「釣狐」が見られることと思はれます。何卒御清鑑の程を御願いたします。

司子茶亭
諸茶茶亭
中巴和泉町一
(23) 五七六九

狂言「釣狐」に就て 歌村彦四郎
 従来「釣狐」の伝説の地としては泉
 洲堺の小林寺と聞及んでおりまして「
 釣狐」を勤めるときはこの寺の女竹を
 戴いて杖にしたとも聞いております。
 昨春茂山弥五郎先生よりの御便りに
 よれば、京都立命館大学教授林屋辰三
 郎先生の御調査に拠り、近江の甲良町
 慶雲山勝樂寺に「釣狐」の伝説あり、
 この寺は佐々木道誉公開基にて南北朝
 時代の近江の守護としてその武名をは
 せたばかりでなく、日本伝統芸術に関
 しても豊かな教養をもちあわせてゐた
 さうであります。

昨春は弥五郎先生御一統、今春は千
 五郎先生御一統で各釣狐が奉納されま
 した。

勿論近江は近江猿楽発祥地でもあり
 そのような環境からも伝説をながく保
 存することが出来たのでしよう。

又和泉流の野村家には堺萬年山小
 寺の「釣狐」の縁起が伝承され、昭和
 九年十一月、十世野村又三郎名にて、
 これを刊行しております、それを左に
 伝載します。

小林寺鎮守喚嚙稻荷大明神縁起

(原文の儘)

泉洲堺の郷萬年山小寺は本朝人王
 五十九代後光院の御宇文和元年に草
 創せり稻荷大明神を崇て鎮守とす其本
 縁を尋るに開山桃源和尚初め帝都建仁
 寺に在せし時稻荷山に詣て仏法弘誓の
 御祈有りし頃不思議の御靈験を蒙り給
 ひ終に泉洲に下り此寺を建立し禪風盛
 に仰ぎて南方の叢林となれり、其後後
 奈良院天文年中に伯蔵司と云ふ僧あり
 て塔頭、耕雲庵に住侍りしに其身甚貧
 にして一鉢のもうけもなふ空しき日の
 み多かりけれど鎮守稻荷明神に参籠し
 て七日七夜舟賦をこらし冥助を祈られ

社告一七、八月は休刊します。

けるに七日満する曉に三足の白狐あり
 て社壇よりおどり出三声鳴て蔵司の前
 にうづくまりしかば是こそ明神感応の
 するしなりと言ひ悦びて抱きとり庵に
 歸りて養育せしに夫より壇僧日々に盛
 にて衣服飲食望の外に充満せり。
 或る夜伯蔵司他行ありし隙に盗人数多
 打入りけるを彼白狐勇士と化して盗人
 を不殘追掃しけり又伯蔵司の甥に狐を
 狛る事を好む者あり彼白狐、伯蔵司の
 形に化けて其家に行て殺生の罪を説き
 しめし様々に教訓しけるに此おのこ元
 より敬きものにて狐の化たるをさとり
 釣らんとするに互に其術を尽しける是
 即喚嚙釣狐と言へる狂言の濫觴也今に
 至る迄明神靈徳白狐の明験源信、篤志
 の人を恵み給ふ事数ふるに暇あらず略
 して縁起の大半をしるし待るのみ、

萬年山 小林寺
 以上のようにあります。伝説は伝説
 であつて真偽のほどは學者におまかせ
 するとして私はどちらも伝説としてう
 けとるものであります。

樂師協議会よりのお知らせ
 四、二九、幸友会にて
 大野禾代氏 囃子小鼓披 (福井社中)
 松田敬氏 囃子シテ披 (内藤社中)
 四、一六、石井会にて
 中島可予子氏 囃子シテ披 (加藤丈社
 中)

幸江氏 〃〃〃
 四、二四、清韻会にて
 長谷川実氏 独吟シテ (加藤良久社中)
 五、一、中部金剛会にて
 水谷さと氏 囃子シテ披 (山田仁社中)
 五、三、松福会にて
 本間千律子氏 囃子シテ披 (佐藤太社
 中)

五、八、霞会にて
 広瀬清子氏 囃子シテ披 (内藤社中)
 谷沢トミ子氏 小鼓披 (田鍋社中)
 五、二二、掬水会にて
 竹内六下氏 能狸々披 (柴田社中)
 谷野 〃能声刈披 (〃)

伺 御 中 暑

一	石	博	藤	長	竜	霞	澗	観	観	高	た	名古屋能楽鑑賞会	名古屋能楽俱樂部
河村 鉦二	西尾 孫太郎	加藤 良久	鬼頭 八郎	藤田 六郎兵衛	田鍋 惣太郎	林 愿藏	野崎 太郎	久田 秀雄	高安 滋郎	田鍋 惣一郎	田鍋 惣太郎	植村 興太郎	
謡会	井会	勝会	門会	生会	吟会	水会	水会	正会	安会	び会	能楽鑑賞会	能楽俱樂部	

風	幸	掬	曲	金	春	正	松	祥	清	掬	能楽協会	名古屋支部	名古屋
殿島 修二	福井 啓次郎	柴田 初太郎	増田 一雄	金 森 準三	山田 仁三郎	加藤 丈太郎	佐藤 太後	永田 虎之助	大塚 一	大塚 一	支部長 田鍋 惣太郎	支部長 田鍋 惣太郎	支部長 田鍋 惣太郎
韻会	友会	水会	水会	竜会	鶯会	楽会	謡会	雲会	風会	水会	能楽協会	名古屋支部	名古屋

(イロハ順)

狂言

狂言人語

歌村彦四郎

・CBCクラブで小舞小謡の鑑賞
六月二十日名古屋CBCクラブの総会後、徳川義親氏の「和泉流狂言について」のユーモアな話につき、家元和泉保之氏の小舞、小鼓、小山伏、七ツ子の実演と「小舞と狂言について」の講演で満場の喝采を博した。

・熱田能楽殿、楽屋増設について
能の隆盛にともない能楽殿も頻りに使用されて喜ばしい次第ですが、地謡の方や婦人の方達に不自由をかけておりますので、能楽協会名古屋支部が率先して楽屋、食堂、休憩室の増設を計画する資金五百万円を我々をはじめとして募金することになりました。

御承知の通り東西には大きな財閥の援助がありますが、名古屋では望まれませんので、同好者の協力を切にお願いいたします。

・共同社各人の芸風
七月一日発行の「能楽思潮」の狂言特輯号に名古屋の共同社各人の芸風がとりあげられていた。小林武志、これを左に抜萃させていただきます。

狂言共同社の各人の芸風は、ということになると、具体的に明らかなのはその晩年、明治四十五年頃から家業を嗣子にゆずり上京して妙技をふるい、在京狂言師の顔色をなからしめた、初代井上菊次郎ぐらゐである。彼の芸に対しては軽妙洒脱というのが共通した見方であり、枯淡とか上品とかいう評価もあるが、また「柿山伏」で柿主にいつけられると、脇座の勾欄へ乗り移つて大臣柱で身を隠す「木の葉隠れ」の型を苦もなく演じたり、「大藤内」の引込みで柱に掴まることに妙味を見せたりする、一步誤れば臭くなる芸を

あえてした人でもあつた。坂元雪鳥はそうした芸をさして、「絢爛」と評しているが、この種の芸は往々独学工夫した者の老境において見られるものである。

したがつて初代菊次郎は太郎冠者物をもつとも得意としていたが、嫡子の二代菊次郎は、先代の不得意であつた四拍子を極め、六儀(台本)を蒐集するなど研究心が旺盛で、芸風も堅く、むしろ大名物を得意とし、その酒脱な芸風は三男の新一郎の方に伝えられた。二代菊次郎の息子が現松次郎で、彼も祖父以来の仏具商を営むむかたわら、前記先覚物故者追善狂言会には「花子」を抜くなど、職分としての修業も怠りなく、最近では東京の和泉流などの影響を受けか、せりふのメリハリも明確になり、洗練され、進歩が著しく、ハロも明確になり、洗練され、進歩が著しく、まかな芸で、年を経て父の芸風に向かう素質は見受けられるが、現在は家が忙で舞台を休みがちのようである。

この両井上に初代菊次郎の四男で狂言共同社の長老格である歌村彦四郎を加えた三人が、家元系の六儀による人たちの代々、たゞ初代菊次郎の頃には早川系、二代菊次郎の代(六年書写)を用いてたが、二代菊次郎の代に宗家七代元業の筆録にかゝる雲形本(安政年間筆録)に改め、今日に及んでいるといふ。

今述べたように松次郎を中心に、近時名古屋の芸風にも変化が認められるが、従来この狂言は構えも運びも日常のそれに近く、とにかく一番をすらすらと演じ終えることをむねとしてゐたので、今その名古屋らしい芸は河村丘造に認められる。

たしかに丘造は引き足差し足などもきつぱ

りせず、東京の狂言を習得している目には頼りなく感じられる。そこに又一種老練な酒脱な味もある、彼は河村健三郎の三男で、六儀も野村又三郎家のものを使用しているが、現在もつばら彼と舞台をともにしている佐藤卯三郎、佐藤秀雄の両氏は生粋の又三郎系とは云えないようである。というのは、卯三郎ははじめ健三郎に師事したが、のち二代菊次郎の教えを受け、後年先代又三郎が同地に教えにくくなるようになつて、再び又三郎系に戻つたものであり、秀雄も元来二代菊次郎の弟子であつたが、家が丘造の宅と近かつた関係で、行をとにもすることが多くなつたものだからである。

ところが、この卯三郎は、京都の茂山千五郎家と非常に類似したイントネーションと発声をしてゐる。(金蔵)

昭和35年9月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5ノ2
井上重兵衛方 電1430
名古屋狂言共同社
印刷所
井上重兵衛方 電1199
株式会社

十月二日午前十一時始
熱田神宮 能楽殿

慶長の昔より伝統を誇る和泉流狂言を、そのまゝ今日まで伝えた我が共同社が結成されて七〇年になります。これを記念して名古屋在住の各流職分の総参加を得て開催致します。

ことに観世流の元考柴田初太郎氏は大曲「安宅」を一世一代の舞台として主演。共同社の佐藤秀雄氏は狂言の大曲「釣狐」を抜く。何卒狂言を愛する皆さまの御援助を御願ひ致します。

共同社結成七〇年記念 狂言と能の会

- | | | |
|----------|-------|-------|
| 狂言末 | 河村 丘造 | 井上松次郎 |
| 狂言子 | 野村又三郎 | 山本光次郎 |
| 狂言安宅 | 柴田初太郎 | 高安 滋郎 |
| 狂言観進帳 | 佐藤卯三郎 | 河村 丘造 |
| 狂言狐 | 佐藤秀雄 | 河村 丘造 |
| 狂言小町街道下り | 歌村彦四郎 | 河村 丘造 |
| 狂言くらびら | 井上松次郎 | 佐藤卯三郎 |
| 狂言土蜘蛛 | 大塚 一二 | 西村 欽也 |
| 千筋ノ伝 | | |
- 主催 狂言共同社

後援 中部日本新聞社
名古屋タイムズ社
能楽協会名古屋支部
取投所中区東門前町五ノ二井上重兵衛方 電一四三〇
千種区内山町三ノ四歌村方 電四〇四六
熱田神宮能楽殿 電二九一二
各百貨店ブレイガイ

- 九月の催能
- | | | |
|------|---------------------|-------|
| 九・一 | 観世会素謡会 前十時半 | 能楽殿 |
| 九・一八 | 名匠鑑賞能 一二・三〇始 | 能楽殿 |
| 九・二二 | 玉水会五周年記念素謡会 前九時 | 能楽殿 |
| 九・二五 | 観世会十周年記念能 第一部 午前一〇時 | 能楽殿 |
| 九・二五 | 観世会十周年記念能 第二部 午後三時 | 能楽殿 |
| 九・二八 | 野口 録久 | 高安 滋郎 |
| 九・二九 | 野口 録久 | 西村 弘敬 |
| 九・三〇 | 野口 録久 | 西村 弘敬 |
| 九・三〇 | 野口 録久 | 西村 弘敬 |
| 九・三〇 | 野口 録久 | 西村 弘敬 |

隠狸(かくしたぬき)主に隠れて狸を捕へている太郎冠者、それを聞き知つた主が、話のついでにフト狸の捕り方を尋ねると、ウツカリのりかけて大あわて、捕つた狸を市へ売りに出たが、抜かりのない主とバツタリ、ここで主と太郎冠者がかくし狸で虚々実々のかげあい、狂言らしいユーモア、和泉保之氏を相手に藤九郎氏円熟した腕の見せどころ。貫錘(もらいむこ)大酒呑の夫に愛想をつか

して実家へ逃げかへつた娘、どんなことがあつても夫の許へ帰らぬとの決心に、男も致し方なく奥の閨へかくまい、夫が来て出る事はならぬといましめる。

ほどなく酔のさめて平身低頭、嫁を貰いに来た舞くどくと子供のことなどを訴へる、これを隠れ聞いてゐた娘、矢も楯もたまたまずのり出すを叱りつける男、結局は男を放つて元に戻る夫婦愛、中に入つてやこしい男役名人弥五郎氏の実感のこもる至芸を。

萩大名(はぎだいめう)在京中の田舎大名、用もすみ一日遊山に萩の見物にゆく、この太郎冠者の知人の庭の主は歌好きで見物客には必ず歌の所望をするので、太郎冠者に扇子の骨にたとへて教へられる、いよゝ萩を見物して歌を所望され、まつてましたとばかり太郎冠者の扇のリードにより、「十重咲き出る」までにはヤツト出たもの、そのあとはいそをつかして消え失せた太郎冠者の教へもえられず、面目もおろさない仕儀となる。

卯三郎氏のとほけた大名、丘造氏の茶屋の主、秀雄氏の太郎冠者いづれも一人一役のはまり役、共同社の代表狂言の一つである。

英訳狂言十番について 鈴木 肇

敗戦後に出版せられた狂言本を概観すると、和泉流では、家元系の本文を伝える小早川本二十冊が、現蔵者吉田幸一氏の手で、古典文庫に復刻せられ、既に十五冊に及んでいる。春末鷲流の鷲賢通本が、朝日新聞社の日本古典全書に三冊に分けて収められた。大蔵流の虎寛本が岩波文庫に三冊に分けて収められ、学徒に便益を供している。七月に岩波の古典文学大系に、山本東本を、現東次郎によつて演出の卜書きを加え、現行の演出に近い形にしたものが出版せられた。その上巻に脇狂言大小名狂言舞狂言のうち、現行主要曲五十番を採っているが、下巻はいつ出るか未定である。新しいだけに、良心的で、頭注があり、舞台を見ない者にも、わかり易く出ている。

この様に三流各様の狂言本が、自由に見られるのも文運隆昌の餘沢であるが、私たちが読みはじめの頃は、田舎では高山房の狂言二番ぐらいいしか無かつた。それから四十年、いつとはなしに集まつた研究資料を、昨秋の台風で、小書庫ぐるみ流失してしまひ、どこまで行つたやら探しようも無かつた。公葬後まだ水につかつた書齋から、拾ひ出した中に、英訳狂言十番があるので、罹災一周年の思い出に紹介する。

訳者野口米次郎は、明治八年本県津島市に生れ、早くアメリカに渡り、英米で詩集数巻を出して、日本の詩人ヨネ、ノグチとして高く評価せられた。明治三十七年帰朝して慶応義塾で教え、六六浮世絵師その他英文和文の著書がある。

狂言十番は明治四十年刊、B六判二百頁、和文と英文とが対照して読める様に組んである。収めたのは、

瓜盗人、ぬげがら、墨塗女、どぶかつちり、鬼の槌、狐塚、伯母酒、土産の鏡、仁王、鬼瓦

の十番で、このうち抜けがら、鬼瓦は本年、仁王は昨年、この能楽殿(熱田神宮)で上演せられた。原文は明治三十六年版の狂言二十番に拠つたものらしい。訳文は平易な英文で、要領よくまとまり、対訳になつていて、初学の者にも、さして困難なものでもない。

昨年版の漢訳万葉集選(鏡箱孫)で、周作人が狂言十番が今次大戦以前に出版された事を知り、正月以来先輩にたずねてゐるが、まだ現物には接し得ない。早く手に入れて、外人の狂言観を御紹介したいと思つてゐる。

(八月八日 筆者は中京大学教授)

もう九月を迎える。芙蓉がさき、葉鶏頭が庭にあざやかな彩りをみせる。この頃は暑い七、八月でも演能のあるのが毎年のことになつてきた。それでも同好者にとつては、夏の一と月、ふた月は退いて、芸能日誌を整理し本もよみ、多彩な行事にそなえるだけの心がけは忘れることはないであらう。ところがわたくし自身も今年こそはと意気込み、「花伝書解釈」(金井清光)、「隨筆集」(谷川徹三)、「うづら花」(横井世有)の三冊をえらんだが、ただ机の上においただけ、ほとんどよま。こういう例年どおりのまよにおわつ

てしまつた。夏書(げがき)の真似事も出来ない。そのくせはか本はよむのである。

七、八月の行事をのほか目についたことを書きしるすと、まず八月の「大衆能と狂言の会」。NHKのテレビで「日本の面」の中に能面があたらしい角度からとりあげられ、金春八条氏が「日本の芸能」に「景清」を演じたことは、昨年橋岡久太郎氏が同じく「眼良」に出たことと特筆大書してよかろう。いやそれ以上に意義がある。八条鑑賞の滅多にならぬ機会であつた。週間誌朝日ジャーナルには梅若六郎氏の袴能「邯鄲」が紹介され、岩波から日本古典文学大系「狂言篇上巻」が、よむかたろで、大蔵流の台本をもとに出た。それと「能本思潮」十二、十三合併号で、歌村彦四郎氏が狂言師としてなか／＼気骨のあることを述べておられるのが、涼風をよんで、まことにたのしかつた。

さて、秋には茂山弥五郎翁の来演、佐藤秀雄氏の「釣狐」。いろ／＼話題の多いことであらう。(筆者はNHK考査室)

伊勢門水翁の遺稿御酒落伝の刊行

伊勢門水といへば直ちに能狂言面を思い、和泉流の狂言師としての翁を考え、さらに御酒落会(おしやらく)の見本としがちである。翁は晩年の資料あつめに刻苦精勵、死ぬ日まで続いた、それから三十年あつめられた稿本は嗣子関水氏によつて守られ愈々今秋刊行されることになつた。内容は、集會宴會の奇略虎の巻、珍旅行記、狂歌、作詞、狂言記等豊富に集録されている。頼まれもせぬ提灯を。

会費二、五〇〇円(八勝館にて御禮込)

申込所 名古屋市中区栄町二 電話〇二七七番 伊勢門水方

薬師協議会よりのお知らせ

五・二八 茲水会

田中きんこ氏 唯子シテ披(有賀社中)

越野 幾子氏 間

有賀 茲子氏 能粘坂キ

六・一一 和調会

鈴木 正治氏 唯子大鼓坂キ(西尾社中)

八・二八 たなびき会

伊藤嘉奈子氏 唯子小

鈴惣一郎社中

狂言 初心 野村 広二

狂言 初心 野村 広二

狂言 初心 野村 広二

御千代寶

登録商標

城で餅

登録商標

桐壺

登録商標

名古屋 龜末廣

中區宝町二丁目

電話 局三三〇三 三四四六

名古屋 龜末廣

名古屋 龜末廣

名古屋 龜末廣

名古屋 龜末廣

狂言

狂言人語

歌村彦四郎

○狂言「釣狐」について

釣狐についての伝説を前号にとりあげておきましたが、大蔵虎光著「狂言不審紙」に述べられてゐるのを抜粋して伝説の結びといたします。

此狂言極意習度也。和泉国大鳥郡東樽屋町小林寺中に、永徳年中耕雲庵と言塔頭有、其住侶を白藏主と言。稻荷大明神を信仰し毎日法施念らず。明神感応有て白狐を得る。此狐靈有随仕の用を達、又盜難を避る事あり。或時は藏主の甥の家に行、殺生の罪を語り戒めしと、是狂言に作る。先祖老僧に猶野千の骨隨を聞、五臟六腑の習ひ其外十八ヶ条の口伝秘密有。猶委舖は執心して相伝の時を待て尋知べし。

又云、江州勝樂寺村敷。此勝樂寺、(京都健仁寺末。大安年中のこと也。天保五年に凡四百五十年余になる)白藏主の住し寺なりと云。又藏の内に釣人の旧地ありと云。兄を小兵衛弟を小十郎と云杯、右白藏主と伯父甥の中成よし。其村五郎右工門と申者方に伝書ありと云。

此の釣狐は狂言中の大曲で一時間余に渉る長時間を殆ど一人で、見物にあかせず、あわてず、気魄と氣力と健康ではじめてなしとげられるものでありま

昭和35年10月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5ノ2
井上重兵衛方 電話1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社 地上社 電話1198

且て故伊勢門水先生が、釣狐は人間が狐に化けてその狐が人間に化けると云う二重の化け方をするのであると、私に語られたことがある、深く味ふべき言葉と思ひます。

○観世会十周年記念能

九月二十五日名古屋観世会十周年記念能は、さすがに大観世の別会だけあつて、観世宗家ははじめの一門、と長老をあつめ、更に狂言には茂山弥五郎師を招聘、一部二部ともに超満員の大盛況と云うよりも大混雑、本年最大の盛事であつた。

○田鍋惣太郎祝賀乱能

十月二十三日の名匠鑑賞能にさきだち、前日の二十二日舞台六十年、五流道成寺、小鼓芸話出版完了記念大乱能会が催される、地元の各師範は勿論観世喜之氏五木田武計氏小島芳雄氏観世武雄氏の狂言三人片輪、金春流本田秀男氏の枕慈童の小鼓、観世流山本勝一氏の道成寺の大鼓、宝生流辰巳孝氏の道成寺の太鼓、嚙子方山本敬一郎氏の通小町任舞、狂言和泉流の宗家泉保之氏の枕慈童の笛等東西よりおすな(の)参加、御本人の田鍋惣太郎氏は鼓で手がけた道成寺のシテを勤められ

るが乱能で道成寺は、はじめでいはないでしようか、御自身語は宝生流だが何流で舞はれるやら、何十回と手がけた道成寺のこと各流の、よいところをとりまぜての田鍋流になるやも知れぬ、とにかく見ものでしよう。

十月の催能

一〇、二 共同社結成七〇年記念
狂言と能の会

一〇、九 風韻会 前九、三〇 能楽殿
能 三井寺 大谷一三務 佐藤秀雄
能 三井寺 大谷一三務 佐藤秀雄

能 文山賊 殿島修二 大野弘之
能 文山賊 殿島修二 大野弘之

能 舟弁慶 橋岡久共 佐藤秀雄
能 舟弁慶 橋岡久共 佐藤秀雄

能 伯母ケ酒 井上松次郎 河村丘造
能 伯母ケ酒 井上松次郎 河村丘造

能 三輪 水藤 又吉 能楽殿
能 三輪 水藤 又吉 能楽殿

能 柿山伏 山本光次郎 大野弘之
能 柿山伏 山本光次郎 大野弘之

能 大瓶狸々 観世 武雄 喜之
能 大瓶狸々 観世 武雄 喜之

能 枕慈童 藤田六郎兵衛 能楽殿
能 枕慈童 藤田六郎兵衛 能楽殿

能 三人片輪 観世 喜之 大塚 一
能 三人片輪 観世 喜之 大塚 一

能 花折 林 恩蔵 田鍋惣一郎
能 花折 林 恩蔵 田鍋惣一郎

能 道成寺 山本勝一 辰巳 孝
能 道成寺 山本勝一 辰巳 孝

能 一〇、二三 名匠鑑賞能 前一時 能楽殿
能 一〇、二三 名匠鑑賞能 前一時 能楽殿

能 弱法師 梅若 六郎 福王茂十郎
能 弱法師 梅若 六郎 福王茂十郎

井筒 観世 喜之 西村弘敬
黒塚 本田 秀男 福王茂十郎
寝番 佐藤 保之 井上松次郎
一〇、二九 NHKホール 後一時
船弁慶 大塚 一 高安滋郎
井上松次郎 井上松次郎
芥川 河村 丘造 佐藤 三郎

狂言かいせつ

歌村彦四郎

文山賊(ふみやまだち)
仕事を仕損じた二人の山賊。云い争いになり遂に果しあいをはじめるが、その勇しい闘争ぶりを人に知られず死ぬるは残念と、書置きをした、めるとき、ふと女房子供のことなど思い出し、犬死が馬鹿らしくなつて、仲直りをして手に手をとつて我が宿へ……いかに狂言らしいユーモラスの一番であります。

伯母ケ酒(おぼがさけ)
酒屋に伯母を持った呑み助の甥。客齋の伯母にいろ／＼とうまい話をもちかけて振まい酒にありつかうとします。が、いかな／＼伯母が聞き入れぬのに腹を立て、鬼の面をつけて伯母の家へのり込み腹一パイ好きな酒を呑んだはよいが、面がとれ、ば何とさきの甥。酒豪の井上松次郎氏が地でゆく酒呑の場面、充分召し上つて下さい、酔っぱらつても女房に叱られる心配はありません。

柿山伏(かきやまぶし)
大峯葛城より帰山の途中の山伏、順のかわくまに柿の木に登り柿を食うところへ柿主が出現、山伏を見つけ、猿だ、いや鳥だと散々になぶり、果ては鷲だと云い鷲なら飛びさうなものと、はやされて飛んで降り、した、かに腰を打つて動けなくなりました。山本老と新進若手大野弘之君のコンビ、生

長した二人の狂言を見守っていた。長した二人の狂言を見守っていた。

(乱能) 三人片輪 (さんになかたわ) 田鍋大乱能の出しもの、しかも演ずる人は観世流の一人者観世喜之氏一統。ならずもの三人、唾、るざり、目くらとそれくゝに偽せ片輪者になつて有徳な人にまんまと抱えられました。主人の不在中酒もりとなり呑めやうたへの大騒ぎ、何が飛び出すやら筆者も見当がつかぬ、何れ潤達で鳴る先生達定めし珍演戯が見られること、楽しみにしてゐます。

(乱能) 花折 (はなおり)

これも大乱能の出しもの、地謡の大御所林蔵氏が金剛流の大塚氏と組み若返つて新発意を演じ大ぜいの職分の出演で賑やかなものであります。都のあたり近い寺の庭の花がさかりなので、近所の人々が誘いあつて花見に参りますが、新発意は師匠の云いつけで花を見せませんので、致し方なく外から花見をします、新発意は自分も御馳走になりたいたいものと、とう／＼庭へ引き入れて共に酒宴になります。こゝで方々の芸づくしが展開されること、でしよう。どうぞ存分にたのしんで下さい。

寝音曲 (ねおんきょく)

太郎冠者の謡をもれ聞いた主人のたつての所望に、一杯よばれて主人の膝枕で寝て謡をうたう太郎冠者、体を起せば声が出なくなり、頭を上げ下げされてゐるうちにとりちがへて、立つたまゝうたう太郎冠者の失敗。

和泉流宗家の和泉保之氏と井上松次郎氏の本格的な現代和泉流の決定版であります。

芥川 (あくたがは) 西ノ宮へ参詣する片輪もの二人、互に

相手に自分の片輪をかくしての同道、芥川の清流に出て顔を洗ふとき、お互に相手の片輪を見つめ笑いあふ。結局いつものように相撲の勝負となり、片輪同志の相撲ぶりのおかしき人間の本領を發揮して居ます。河村丘造と佐藤卯三郎の両氏名古屋和泉流本来の狂言の型。

狂言初心 野村広二

十月はまことにお目でない月である。名古屋和泉流が狂言共同社をつつてから、七十周年を迎えた佳年を記念する月だからである。心からお目どうを申し上げます。ふりかえれば、明治、大正、昭和をへ、戦後のつらい時をくぐつて今日を迎える長い間には、能楽界、狂言の世界と時代のうつりかわりのはげしさのなかで、会の進め方、演目、後進の養成など、感無量のもの、次から次へとおもひ起されること、でしよう。七十年の間には、さぞかし、狂言の伝統の保持と狂言の周辺の動きに対する貴重な記録が実に沢山あることとおもふ。これについては折にふれさせていたがたい。

でも、能のふんいきを自分からこわすことのあるのを時おりみうける。この間、観世鏡之丞氏が「卒都婆小町」を、ここ数年かつてない程好演し、名古屋演能史の一頁を大きく飾るといふ位なのに、余いんをのこして幕に入るのを十分に味わわず、見所中、あちらこちらで立上られ、黒い鳥帽子のいただきがわづかにみえるといつた始末。また能をみる心得のある方でも、シテやワキが橋掛で能一番のふんいきをつくり出してその前を往き来されることがあるようだ。演能の修練と同時に、観能の心得もなくてはなるまい。これは一体誰からおしえられることであらうか。狂言にも、能にも、どちらにも、エチケツトをもちあいたいものです。

第三は、茂山弥五郎翁 (大藏流) の「黄鶯」は絶品であつたこと。かえつてきた娘と悔いてわびにきた鶯に対する弥五郎翁のあごの出し方ひとつで、その場がきまつてしまふ。折り目正しく、しかも流れるような演技のなかに、みる者の顔はほころんだり、くしやくしやになつたりする。終りのすいも甘いもかみわたたひとりごとが本当に印象的だつた。これと同日おこなわれた名古屋勢の「萩大名」、すつとばけた大名の無教養ぶりが、うまいコンビでみせてもらえてとてもうれしかった。

名古屋和泉会 (仮称) 結成 狂言共同社

徳川義親氏の提唱により狂言愛好者の賛助を得て、和泉流宗家、和泉保之氏と狂言共同社の後援会のようなものを結成、宗家を迎えて狂言会、研究会、などを設けたいと準備中であり、御賛同を賜り度くお取します。



花 甚

直売店 駅前豊田ビル一階 TEL 54587
名古屋駅表玄関 TEL 9078
温室 千種区猪高町西一社 TEL (猪高) 25

東新町電停東 CBC放送局西隣
TEL 24 0487・5296

狂言

昭和35年11月1日発行
 発行所
 名古屋市中区表門前町5-2
 井上重兵衛 電話1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 井上重兵衛 電話1190
 株式会社

狂言人語

歌村彦四郎

御礼

共同社結成七〇年の狂言と能の会を催しましたところ、皆様の御援助を得まして盛況に終りましたことを厚く感謝いたします。

共同社はずねに名古屋に於ける流派を超越した能楽の発展を念願するものであります。今回の催しもその意味におきまして、義性をも顧みず之を敢行いたしました。

何卒私共の意のあるところを諒せられ名古屋の能楽をはぐくみ、育ていただきたいとお願い致します。

能楽学校の開設

東京旧梅若郎に「梅若能楽学院」の名称で、校長には現法政大学教授岩倉俱栄氏、教務主任は梅若六郎氏で地拍子四拍子、演劇理論、音楽理論や伝書の研究等知育の方面も充実する由、開校は三十六年四月一日の予定。

名古屋和泉会(仮称)結成

徳川義親氏の提唱により、ひろく狂言愛好者に呼びかけ、和泉流宗家、和泉保之氏と狂言共同社の後援会のようなものを結成、宗家を迎えて狂言会、狂言小うたひ、小舞などの研究会を設け

たいと準備中で近く公演会を開く予定であります、振つて御参加を御願致します。

十一月と十二月の催能

- 一、二、三 婦人師範連合謡囃子会 能楽殿
- 一、二、六 橋岡先生喜寿祝賀能
- 前九、三〇 淡交会
- 養老 大口慶次郎 井上松次郎
- 粟老 野村又三郎 井上松次郎
- 羽衣 岡田頼允 井上松次郎
- 土蜘蛛 伊吹洋一郎 井上松次郎
- 附子 野村万作 能楽殿
- 一、二、二 やるまい会 後三時 能楽殿
- 磁石 茂山千之丞 野村又三郎
- 狂言 千鳥 野村又三郎 河村丘造
- 狂言 月見座頭 茂山七五三 井上松次郎
- 狂言 千切木 野村万之丞 井上松次郎
- 狂言 田沢義弘 井上松次郎
- 狂言 田山七三三 野村又三郎
- 一、二、三 幸友会能前九、三〇 能楽殿
- 天鼓 吉田俊彦 能楽殿
- 柑子 井上松次郎 能楽殿
- 舟弁慶 佐藤秀雄 歌村彦四郎
- 狂言 舟弁慶 佐藤秀雄 歌村彦四郎
- 一、二、二〇 秋のかずみ囃子会 能楽殿
- 一、二、二〇 親世会例会 能楽殿
- 阿漕 大槻十三 能楽殿
- 能 朝長 佐藤卯三郎 能楽殿
- 能 狐塚 梅若六郎 能楽殿
- 能 狐塚 井上松次郎 能楽殿
- 能 采女 山本博之 河村丘造
- 能 采女 佐藤秀雄 能楽殿

一、二、二七 掬水会能 能楽殿

能 鉢木 柴田北武 能楽殿

能 不見不聞 大野弘之 山本光次郎

能 一、二、四 辰己会 佐藤卯三郎 歌村彦四郎

能 小袖置我 前内藤純子 能楽殿

能 半田村 三神純子 能楽殿

能 玉葛 如富次 能楽殿

能 融 野口録久 能楽殿

能 昆布壳 野村又三郎 佐藤卯三郎

一、二、二一 岡崎電神会秋季大会

狂言 二九十八 河村丘造 大野弘之

一、二、一八 乱能 能楽協会名古屋支部 能楽殿

能 小袖置我 河村総一郎 吉田定男

能 八島 佐藤卯三郎 能楽殿

能 末広 田鍋惣太郎 鬼頭八郎

能 羽衣 藤田六郎兵衛 西尾孫太郎

能 花筐 野村又三郎 鬼頭喜太郎

能 山姥 野村又三郎 鬼頭喜太郎

能 釣針 鬼頭季信 能楽殿

能 望月 鶴世流連中 井上松次郎

能 望月 田鍋惣一郎 井上松次郎

能 望月 高安 滋郎

狂言かいせつ

栗焼(くりやき) 歌村彦四郎

饗応のため到来の栗を焼くよう云いつけられた太郎冠者、栗の焼けたうまさうな匂いにとまらず、一つ二つとつまみ食いをするうちに、預つた四十の栗を皆平げてしまいました。

その云いわけに驚いた神と三十四人の公達まで引っぱり出したが、残つて有る筈の四つの栗の始末に「栗焼く人の言葉に逃げて栗、追い栗、灰まぎれとて三つは失せて何もなし、お主どのの御心ちうお恥しう存ずる」と舞納めます。

この栗を焼く仕草に各人の個性が発揮されるわけであります。

附子(ぶす)

るす番を仰せつかった太郎冠者と次郎冠者、大毒物として預つた附子が砂糖であることを発見、二人してうまいうまいとなめてしまいます。

さてそのあとの始末は「一口くへども死なれもせず、二口くへどもまだ死なず、三口四口、五口六口、十口あまり皆になるまで喰ふたれども、死なれぬ命目出度きよ、なんぼうかしらかたの命や」あの横着者やるまいぞ。

千鳥(ちどり)

かね払いの悪い主人に仕へる太郎冠者が祭り酒をとり酒屋へ参ります、引替へでなければ酒を渡さぬと云う酒屋の主人に、津島まつりの話、雅児流鏑馬の真似などして四苦八苦のすへ、まんなと「お馬が参る」と持ち逃げする太郎冠者苦心の一節。

月見座頭(つきみざとう)

大藏流独特の名狂言であります。盲人が中秋の名月の夜、人々が月を詠めてたのしむのを羨み、虫の音を聞きに野辺へ出てはからずも来合せた人の馳走になり舞など舞つてたのしみあそぶ。

別れてのちその人の気まぐれから、別人をよそおつて喧嘩をしかけられて到されます。人間の機微を描いたものであります。

千切木(ちぎりき)

連歌の会に除けものにされた太郎と云う男が、当番の家へどなり込み勝手に振まふので、集つてゐる人々に散々にいためつけられます。

女房がこれを聞いてとび出し気の弱い亭主を仕返しに追い立て、各人の家を訪へど何れもると云う。るすを幸いの勇猛自慢振り、狂言のもつおかしみであります。

柑子(こうじ)
お振まいに出た柑子が三ツ成りであつたので珍らしい思い、供の太郎冠者に持たせてかへつた。翌日主がその柑子を渡せと申すが太郎冠者のお腹へ入つてありません、その申訳に俊寛を例に引いた物語をいたします。

狐塚(きつねづか)

実りの秋、狐塚と云うところへ鳥を追うように云いつけられた太郎冠者、狐が出るとうわさにビク／＼しているといふ頃、薄暗く暮れてゆく、フト自分と呼ぶ声がする、テツキリ狐が出たものと合点して訪ねて来た主人と次郎冠者を捕へて引く／＼つてしまします。さてこの二匹の狐を料理せうと鎌を借りに行きますがきて帰つて見ると、

不見不聞(みずきかず)

一人召使う太郎冠者がツンボで留守が心もとないで出入りの座頭菊市を頼んで出かけます。所在なきにツンボをなぶる菊市に太郎冠者は小舞を舞つて謡を聞かせ、足で顔をなでる、之を悟つた菊市は平家を語つてツンボを散々にこきおろす。

盲は耳で相手の動きを洞察し、ツンボは目で相手の意図を探らんとする虚々実々の仕料の妙、この狂言の見どころであります。

昆布売(こぶうり)

若狭の国小浜の昆布売を道連れにした大名、太刀を持たせようと種々なぶるうちに、腹を立てた昆布売に逆になぶられてしまします。例の大名の我がまゝの間のけきを風刺したものです。

大役「釣狐」を演じて 佐藤秀雄

十月二日七十周年記念の狂言と能の会

に出演待望の釣狐を演じ終えて、此の半年に亘る稽古を振返つてみてしみじみ稽古量の不足を痛感しました。覚え切れぬ程の制約、終始張りつめた緊張した精神、激げしい意気込みと動きによる体力の消耗、流汗淋漓と云うか二枚も三枚もの肌着を通す汗、緊張の連続の一時間余の前シテ、動きの激しい狐そのものの感じを出さねばならぬ後シテ。そしてアドとの呼吸の六ヶ敷しい引合い。

狂言 初心 野村広二

菊の季節、黄菊の花が目どころよい。庭の桐の葉がカサカサと、月の夜に、うらがなしく、乾いた音をたてるのも、この頃からである。十一月になると芸術祭は真つ盛り、今年には長唄で山姥新作、撰待からヒントをえた義太夫が一本ラジオにできるはず。この間院展で新井勝利の屏風絵「かきつばた」を御覧になつた方も多いでしょう。そうす、一杜若」と同じ題材。こういうタイプの絵はもうま

れで、この絵はがきたけをもとめたが、図柄はかきつばたを背に業平とほかに二人、歌を詠じた直後のしんとして息づまる五月の日の中の様が胸にせまつてきます。それにしても狂言の絵はなぜなのでしょう。あの明るさが絵にならないのか。いや今度画師で狂言師だつた伊勢門水翁の遺稿「御酒落伝」(おしやくでん)が絵入りで刊行されます。これを視つて五日に、記念の会が催される。故人をしのんで盛會を祈りたい。さて、この頃竹の皮をみるのが余りない、少なくなつたし、これだけでなくはならないものもある。上等の菓子もかえつてこれに包まれる。その竹皮でも上質と薄つてこれに包まれる。その竹皮も結構。子、美味を身にだいて、よろこば

れ、うらやましがる。狂言もそうです、かるがるしい芸でなく、しつかりして質のよいものをもとめてはなるまい。狂言をしり、好きになり、愛するにはよい狂言をみることに、そして他方よむことです。これはほかの芸術部門、囲碁、将棋の場合も同じ。正しくにせものはいけないとおもいます。さあ十一月を楽しみましょう。

おひらき

楽師協議会

- 一〇、一 竜吟会
- 佐藤 英雄氏 乱 太鼓披キ 野崎社中
- 山本とよ子氏 囃子小鼓 福井社中
- 水谷 文雄氏 笛 寛井社中
- 赤間 鎮雄氏 金 森社中
- 木下弥兵衛氏 藤 田社中
- 菊屋 稔氏 シテ 加藤文社中
- 一〇、一〇 風韻会
- 富士道周明氏 舞丸シテ披キ 殿島社中
- 佐藤アヤ子氏 〃 〃 〃
- 一〇、二 共同社七十年記念狂言会
- 佐藤 秀雄氏 釣狐 披キ 共同社
- 二、十一 岡崎竜神会秋季囃子会
- 加藤みね子氏 囃子シテ披キ 竹内社中
- 岩附 たつ氏 〃 〃 〃
- 近藤 静子氏 〃 〃 〃
- 伊藤美代子氏 〃 〃 〃
- 中西 正江氏 〃 〃 〃
- 梨本 秀治氏 〃 〃 〃

瀬戸市梶田俊氏より扶茶碗の寄贈

九阜会々員梶田俊氏より楽屋用として葵寮加藤春二氏作抹茶碗十ヶの寄贈あり御礼を申し上げます。 能楽協会名古屋支部

あながき

共同社

「当「狂言」も去る三十一年十二月発行以来四年をつゞけました。つまらぬ小新聞でも名古屋の能楽界のために、多少とも寄与したこと、自惚れております。十二月は催しも少ないので休刊いたします。来三十六年正月よりは機構を整備してより有効なものを出したいと努力するつもりであります。お気づきのことがありましたら御遠慮なく御投稿を歓迎いたします。

何と云つても お茶は升半

創業天保十二年 升半茶店